

# 新型コロナウイルス 感染対応緊急支援助成

「支えあう多様な  
コミュニティづくり支援事業」  
実施報告書 2022年～2023年



熊本県新型コロナウイルス感染対応緊急支援助成協議会

構成団体

公益財団法人熊本YMCA

一般財団法人くまもと未来創造基金

## 目次

1. はじめに	P1
2. 事業概要	P2
3. 伴走者の紹介	P4
4. 採択実行団体	P5
5. 実行団体事例紹介	
お世話役を発掘&育成し、	
コミュニティを継続する仕組みを作る。	P6
支えあってみんなで子育て	P8
官と民が協働で子ども達を真ん中にした	
地域共生の居場所づくり	P10
未来輝く!いのちを慈しむ	
ハイブリット包括的性教育と相談事業	P12
すべての子どもたちに安心できる居場所と生きる力を	P14
南阿蘇を「もっと好きに、もっと元気に」地域まるごと事業	P16
高校生・大学生のキャリア形成を支援する	
コミュニティづくり	P18
農福連携の経験を	
地域コミュニティづくりにつなぐモデル事業	P20
もう一度繋ぎ直す、廃校活用したおもやいの居場所作り	P22
社会資源に繋がれない外国人のための	
アウトリーチ型支援事業	P24
6. 伴走支援について	P26
7. 事業の成果	P37
8. 課題と今後の展望	P42

休眠預金事業はSDGsの達成に貢献しています

## SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



# 1 はじめに



公益財団法人熊本YMCA

理事長 **光永 尚生**

「支えあう多様なコミュニティづくり」という願いを持ち、今回の休眠預金活用事業の実行に当たられた各団体の皆様のお働きに感謝致します。

長引く新型コロナウイルス感染症の影響やウクライナでの紛争、各地での大災害など、今も不安と困難の中で多くの人々が生活しています。特に社会的に弱い立場とされる、子ども、若者、高齢者、障がいのある方々、そしてそれを支える人たちにとっても厳しい環境が続いています。熊本はまだ熊本地震からの復興半ばでもあり、多くの人々が支援を必要と

しています。人と人とのつながり・支え合いがこれまで以上に求められる時代に、私たちはいます。

本事業では、大切な休眠預金を活用して、各分野の10の団体に約9カ月を通して活動いただきました。子育て家族や経済的な困窮を抱える家庭を支える活動、不登校の子どもたちも安心して集える第三の居場所づくり、障がいのある方が自信を持って働く場づくり、外国の方も安心して住めるコミュニティづくりの広がり、子どもからお年寄りまで世代を越えた交流の場、高校生・学生のキャリア形成の支援の取り組みなど、今の社会の中で手を差し伸べる必要のある人々のために立ち上がり、日々取り組まれている各団体の皆様の活動は、大変尊いお働きです。伴走支援いただいたアドバイザーの皆様には、様々な悩みや苦難の時に支えていただき、また各団体の運営基盤の成長に大きく寄与いただきました。この事業のもうひとつの成果は、活動報告や研修、交流会などを通して、団体同士の協力や学び合いにより、お互いの切磋琢磨と協力協働が生まれたことであり、さらに今後の支え合いの絆も熊本の大きな力となります。それぞれの団体運営が強められたことはもちろん、これからこの熊本の市民活動をリードしていくコミュニティという意味でも、重要な要素となるでしょう。

人はひとりではできることに限りがあります。それでも手を差し伸べ助け合い支え合うことでそれ以上の力が発揮できます。そしてそこで支えられた人々、支えた人々がさらに次の世代につないでいく。支えあうコミュニティがより広がることにより、人々が安心して安全な生活を送れるような熊本を創ることが、今を生きる私たちの使命です。

これからもそれぞれが手をとりあって、素晴らしい熊本の未来を共に守っていきましょう。



一般財団法人くまもと未来創造基金

専務理事 **石原 靖也**

熊本YMCAとの共催事業として、第二回目となる緊急支援助成事業において実行10団体、伴走頂いたプログラムオフィサー、アドバイザーの皆様にご心から謝意を表します。今回は、「支えあう多様なコミュニティづくり」と題し、特色ある団体同士が、研修・交流会・報告会を通じて、それぞれのフィロソフィを明確にされたばかりでなく、同じ地域課題に対して論じ合い、横の絆を明確化された事が、コミュニティの広がりや熊本の地域社会の新たな在り方を示す素晴らしい機会となったと感じます。核家族化が進む近年では、経済的な格差の拡大等、希薄な関係性の社会が生まれていく姿に心を痛み、不安を覚えることも多くあり、特に熊本では災害による影響や、コロナ禍によるコミュニティの分断が顕著となり、子どもたちや学生、障がいを持つ人々、子育て世代のお母さんたち、外国の方等社会的なハンディを抱える人々へ過重な負担がのしかかっている現状があります。そこに安心して暮らせる居場所としてのコミュニティが形成され、世代や立場を超えた方々の新しいコミュニティが各団体の皆様の手により生まれていることに、うれしい熊本の未来の姿を想像することが出来ました。

実行団体の報告の中に『「地域の力」とは「困りごとをほっとけないと感じる人・困りごとを抱えた当事者や家族・サービスを提供する専門家」この三者が「共同体感覚」で繋がり、計画的に相互助け合いを行う、「福祉コミュニティ」のはたらきのことです。それは我々自身のことです。』とあります。まさに私たちが取り戻すべき、そして次なる次元へと地域を発展させていく、コミュニティの姿であり、「道標」であると確信しました。

実行団体の報告の中に『「地域の力」とは「困りごとをほっとけないと感じる人・困りごとを抱えた当事者や家族・サービスを提供する専門家」この三者が「共同体感覚」で繋がり、計画的に相互助け合いを行う、「福祉コミュニティ」のはたらきのことです。それは我々自身のことです。』とあります。まさに私たちが取り戻すべき、そして次なる次元へと地域を発展させていく、コミュニティの姿であり、「道標」であると確信しました。

# 2 事業概要

## 【資金分配団体】

- 幹事団体(全体統括・助成金事務管理)：公益財団法人熊本YMCA
- 構成団体(伴走支援・研修)：一般財団法人くまもと未来創造基金

## 【優先的に取り組む社会課題】

本助成が対象とする事業は、社会課題の解決をめざす実行団体が実施する事業であり、以下JANPIAが提示する7つの「優先的に解決すべき社会の諸課題」のうち、

### 1) 子ども及び若者の支援に係る活動

- ① 経済的困窮など、家庭内に課題を抱える子どもの支援
- ② 日常生活や成長に困難を抱える子どもと若者の育成支援

### 3) 地域社会における活力の低下その他の社会的に困難な状況に直面している地域の支援に係る活動

- ② 安心・安全に暮らせるコミュニティづくりへの支援

における課題解決を目指す事業。

## 【事業の目的】

長引く新型コロナウイルス感染拡大の影響により、行動が制限され、新たに顕著化した様々な社会課題。様々な問題を抱えた子どもや若者やその家族、被災者などが安心して自分らしく過ごせる居場所・コミュニティが必要とされている。県内各地で活動している支援団体への助成事業による緊急課題の解決や、伴走支援による団体の基盤強化に取り組むことで、多様なコミュニティが県内各地の形成され、災害やクライシスに対応できるこれまでになかった広域で多様な連携体制の構築を目指す。

## 【事業の背景】

「2020年新型コロナウイルス感染対応緊急支援助成事業」における7実行団体のモデル事業を通して「ひとり親家庭・学校に通えない子ども・ひきこもりの若者の支援、障がい者の働き場の」支援を行った。合わせて、実行団体への伴走支援・基盤強化により、ひとり親家庭への支援や子ども食堂の広がり、新しい障がい者の働き場の場づくりなど目標とする成果を上げると共に、実行団体同士の連携や支援コミュニティが形成されつつある。

一方で、事業を通して見えてきた更なる課題や長引くコロナ感染拡大、相次ぐ自然災害で顕著化した社会課題がまだまだ多くあることが分かった。

- 相次ぐ自然災害(熊本地震・豪雨災害など)により、地域コミュニティが分断されたり、再構築の途中にあり、安心して集える居場所がない地域がある。
- 新型コロナ感染拡大により影響を受けている子ども達や若者の支援の場が少なく、家庭だけで対応している現状もある。ニーズに応じて安心して過ごせる多様な居場所が必要である。
- 子ども食堂の広がり(県内150か所：2023年3月現在)や行政・企業との連携を通して食物や物資支援はある程度充実しつつあるが、新型コロナ感染拡大で不安を抱え学校に通えなくなった子どもたちは増加している(2020年度熊本県国公立私立長期欠席者4,202人、前年度より497人増加。このうち不登校約2,996人、前年度より312人増加。1千人当たり不登校者数20.6人)。県内では、行政機関相談所の増設、オンライン学習支援体制(熊本市)など公的支援体制は整いつつあるが、民間で受け入れる居場所や学びの場がまだ少ない現状であり、長期化することによって更なる社会問題への発展が危惧される。また、支援団体の運営基盤も弱く、専門機関との連携体制も不十分であり、公的相談に繋がっていない現状である。

今後も予想される災害やクライシス、地域課題を柔軟に対応できる居場所や多様なつながりが必要とされている。

## 【事業概要】

- 長引く新型コロナ感染拡大の影響により新たに生じた、または拡大したニーズに対応する支援事業を行う。
- 「子ども」「若者」「障がい者」「被災者」など社会的に弱い立場にある人を対象に、「身近に自分らしく安心して過ごせる場」「多様な居場所や学び・体験ができる場づくり」「地域の資源を生かした持続可能な活動」「多様なセクターと連携した支援連携体制づくり」を行う非営利活動・支援関連事業を対象とする。
- この事業を通して、「災害やクライシス、地域課題に柔軟に対応できる支えあう地域・多様なコミュニティづくり」を目指す。

## 【事業実施後(1年後)以降に目標とする状態】

- ① 様々な問題を抱えた子どもや若者やその家族、被災者などが安心して自分らしく過ごせる居場所が地域や色々な場所にできている。
- ② 日常生活に困難や問題を抱える子どもや若者たちなど、必要とする人たちが、相談・支援を受けられる体制ができ、県内に広がりつつある。
- ③ 実行団体の運営基盤と連携が強化されることにより、地域の課題解決に柔軟に対応できる体制ができつつある。

## 【募集チラシ】



## 【採択内定までの流れ】

- ① 公募期間 4月1日(金)～4月24日(日)
- ② 書類による第1次審査 5月6日(金)
- ③ 書類審査通過団体向けヒアリング 5月9日(月)～12日(木)
- ④ 最終審査会にて選定最終決定 5月14日(土) 13:30～17:00 場所：熊本YMCA本館
- ⑤ 実行団体決定の公表 選定された実行団体の名称、事業名、事業概要を公表 5月20日(金)
- ⑥ 助成金支払い 資金提供契約書の締結(実行団体と資金分配団体) 5月下旬

## 3 伴走者の紹介

### ●プログラムオフィサー



河合 将生

NPO組織基盤強化コンサルタント office musubime 代表  
2011年7月、office musubime (オフィス ムスビメ)を設立。伴走支援を専門としながらNPOの基盤強化、組織診断、評価、ファンドレイジング支援、コンサルティング・ファシリテーション等に取り組む。コミュニティ財団や地域づくり、フリースクール、子ども・子育て支援、国際協力など、複数のNPOに役員やアドバイザーとして関わるほか、大学の非常勤講師や研修講師、チャリティや寄付に関する相談・助言等の活動も行っている。



中村 賢次郎

公益財団法人 熊本YMCA 理事  
「共に生きる社会」、「地球環境の保全」、「生涯学習の推進」、「ウェルネス活動」、「ボランティア活動」、「平和な世界」を具体的な事業や活動を通して実現する社会教育団体。教育事業だけでなく、災害支援や国際協力、障がい児支援なども行い、熊本県民の精神・知性・身体の全人的成長を願い、社会に貢献するリーダーを育成する活動を展開している。



宮原 美智子

一般財団法人くまもと未来創造基金 理事／伴走支援ファンドレイザー  
熊本県阿蘇市出身。大学卒業後、小中学校の教師。結婚で退職。暮らしの中の省エネ実践から気候変動・環境教育などに取り組む。ドイツへの環境視察を通して「市民活動の重要性」を学び、九州全体環境活動団体の中間支援組織の運営に関わる。熊本地震後、「一般財団法人くまもと未来創造基金」を立ち上げ、「助成」&「団体基盤強化伴走支援」を実施、市民活動をサポートしている。

### ●アドバイザー



中山 勇魚

特定非営利活動法人 Chance For All 代表理事  
こどもの頃に家族で夜逃げをするという環境で育ったことで、今の社会のあり方や子どもたちが育つ環境に疑問を持つ。その後、学童保育でのボランティアを通じて放課後の可能性に気づき、2013年にCFAを設立。こどもたちの居場所や遊び場づくりに取り組む。日本放課後学会副会長、日本放課後児童指導員協会理事、教育総合研究所委員など、こどもたちの自由やあそびの大切さについての普及啓発活動も行う。



三島 理恵

認定NPO法人 全国こども食堂支援センター・むすびえ 理事  
2009年6月から設立スタッフとして「寄付文化の醸成」を目的とした日本ファンドレイジング協会(JFRA)に入職し、事業の立ち上げ、広報全般を担うコミュニケーション・ディレクターとして従事。また、企業、NPO、行政、国際機関などと協働で行っている寄付キャンペーン「寄付月間-Giving December-」の立ち上げにも尽力。現在、JFRAコミュニケーションアドバイザー。「困った時に助けてくれる人がいると思える社会の実現」に向けて活動をする中で、こども食堂との出会いがあり、むすびえの立ち上げに参画。2022年から現職。むすびえでは、休眠預金事業のプログラムオフィサー、「イオンこども食堂応援団」の立ち上げ、こども食堂の複合的価値を捉える指標開発・測定を行う事業やこども食堂基金プロジェクトリーダー等を担う。認定ファンドレイザー。広島県尾道市在住。



五味 真紀

NPO法人 ハートフル・ポート代表理事  
熊本市出身。アメリカの大学を卒業後、熊本県庁国際課勤務。結婚を機に東京へ移り、子育ての傍ら翻訳業・様々な地域活動に従事。義母の介護・看取り後、2014年住み開きカフェハートフル・ポート開業。子どもから高齢者を対象とした様々な交流事業を展開、2022年NPO法人を設立。2014年から独り暮らしの高齢者への生活支援団体の事務局。かながわシニア起業家ビジネスグランプリ2018神奈川県知事賞受賞。横浜在住。

## 4 採択実行団体

団体名	事業名	活動地域	採択金額
「やっちろ保健室」運営協議会	お世話役を発掘&育成し、コミュニティを継続する仕組みを作る。	熊本県内	¥4,765,000
採択理由：プログラムを作っていくプロセスに楽しみがあると感じる。人材のプラットフォームを整備するために、いろいろな団体の枠を超えているような人材を登録する、というのは、連携と対話の可能性がある。			
子育てネットワーク「縁側moyai」	支えあってみんなで子育て	熊本県内	¥4,890,763
採択理由：コロナ禍の中で特にニーズがあると感じた。支えてもらった人が支える側にまわるといふ循環があることで活動の広がりに期待できる。居場所＝拠り所であり、物理的ではなく、それぞれの拠り所を作るという部分が評価できる。			
子ども支援活動ボランティアグループ ゆめの絆〰わらびかみ(童神)	官と民が協働で子ども達を真ん中にした地域共生の居場所づくり	天草市	¥4,998,985
採択理由：行政と民間の担う部分の整理と、地域コミュニティの核が必要という部分が、課題の分析を丁寧にしていると感じた。広い天草地域でどんなことをどんな順番でやるかの戦略性が考えられているところが評価のポイント。			
NPO法人せいしとらんし熊本	未来輝く!いのちを慈しむハイブリット包括的性教育と相談事業	熊本県内	¥5,000,000
採択理由：代表1人ではなくチームで分担して取り組むのが高評価。関係者との対話や連携は今後に期待するところ。「包括的性教育」の考え方が、従来の性教育の観点と違い、子どもたちからの視点であり、非常に有意義である。			
認定NPO法人NEXTEP	すべての子どもたちに安心できる居場所と生きる力を	熊本市、合志市、菊陽町	¥9,664,000
採択理由：伴走型のプロジェクトを今後どうやって行くかということでチャレンジしていると感じた。居住支援というのは社会的ニーズが高い。他の団体でもできるモデルケースになるという部分で、今後の広がりにも期待したい。			
株式会社 南阿蘇ケアサービス	南阿蘇を「もっと好きに、もっと元気に」地域まるごと事業	南阿蘇村	¥9,980,962
採択理由：南阿蘇という地域でシームレスケアにチャレンジするというのがとても印象的だった。申請が通らなくても、自分たちでやろうという覚悟が感じられたところが高評価。			
一般社団法人フミダス	高校生・大学生のキャリア形成を支援するコミュニティづくり	熊本県	¥9,998,420
採択理由：若者や高校生という対象が他の団体とは違う点は評価できる。対象地域が人吉というのも良い。コミュニティづくりとしての要素だけでなく、若者が地元の良さを再発見する、地域とのつながりという部分で期待したい。			
一般社団法人オルタナ	農福連携の経験を地域コミュニティづくりにつなぐモデル事業	熊本市	¥10,000,000
採択理由：農福連携の実績もあり、なぜ農園なのか?という説明の部分について自分たちでしっかり理解しているところを高評価。農業に特化したネットワークを広げてさらに強化し、実行可能性という意味でも法人化までつなげてほしい。			
一般社団法人sol	もう一度繋ぎ直す、廃校活用したおもやいの居場所作り	高森町	¥10,000,000
採択理由：作業療法士を中心とした新たなネットワークに期待したい。イメージ図を見るともう少し他の分野の人たちとのかわりをもつことで事業の広がりの可能性が見込める。			
ワールドフレンズ天草	社会資源に繋がれない外国人のためのアウトリーチ型支援事業	天草地域	¥10,000,000
採択理由：多様なコミュニティは大切に、資料を見ると数字的なエビデンスも含まれ、質問に対する答えも的確だった。アウトリーチという自分たちが行くという姿勢が良い。予算の使い方も具体的で高得点。			

# 5 実行団体事例紹介



## お世話役を発掘&育成し、コミュニティを継続する仕組みを作る。

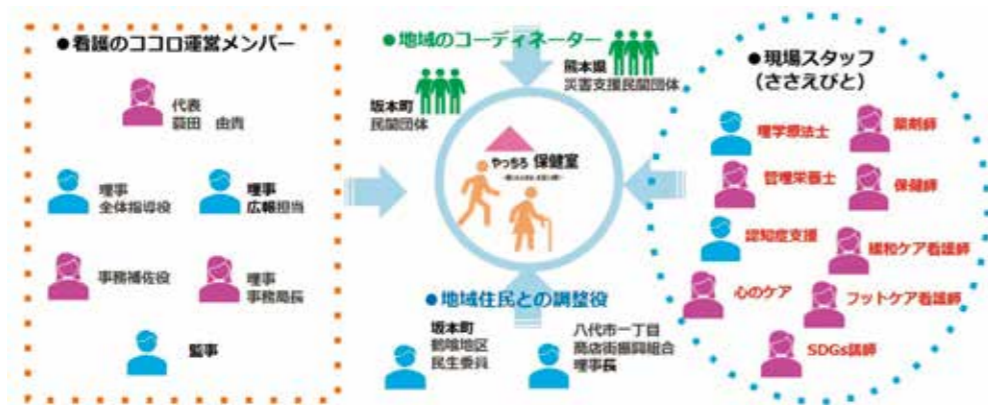
### 「やっちょろ保健室」運営協議会（一般社団法人看護のココロ）

「やっちょろ保健室」運営協議会（一般社団法人看護のココロ）は、民間のボランティア団体である。看護スキルとマインドを活かして、地域包括ケアシステムを構築に貢献する。ニーズ調査を基に拠点地を決め、「地域住民の調整役」と「地域コーディネーター」を設置する。暮らしのノート帳を活用し、健康相談窓口やイベントなどを月に1回開催する。必要時は行政機関への連携も行う。



### 事業概要

「やっちょろ保健室」運営協議会は、令和2年7月の豪雨災害をきっかけに、同年8月に任意団体として設立された。約1年間にわたるニーズ調査の後、同団体は2か所の相談窓口業務や学びの場、イベントなどを開催することで、高齢者の心と身体の支援活動を行う。災害が発生した八代市坂本町では、高齢化率が50%を超え、医療機関も被災している。このような状況から、同団体は活動を継続する必要性を感じ、組織基盤の強化と人材発掘に取り組んでいる。人材発掘には「ささえびと」という名称のお世話役があたり、ボランティア団体としての活動を継続することを目指している。



### 取り組んだ課題・目指すコミュニティ

高齢化と人口減少が進む中、地域での支援格差が拡大しているとともに、災害や新型コロナの影響により、お世話役としての民生委員の担い手不足が深刻化している。外出や人との交流機会の減少は、心身ともに弱ってしまう人が増加することを意味し、地域で最後まで生活を続けることが困難になる可能性もある。そこで、地域全体の幸福度向上を目指すため、お世話役「ささえびと」と地域のキーパーソンが協働し、コミュニティ作りを進めていく。

### 事業内容

当団体では、以下の4つの活動を行っている。

- 1 八代市坂本町鶴喰町と八代市本町1丁目の2か所で、月に1回「まちの保健室事業」を実施。
- 2 任意団体から法人化し、団体としての基盤強化を図り、組織体制を見直す。
- 3 広報活動を行い、活動内容を知ってもらい、お世話役「ささえびと」の発掘につなげる。
- 4 人材育成につなげることで、ささえびとの定義や考え方を整理し、必要なマインドやスキルを検討する。  
学ぶ→活動する→振り返る(成長する)のサイクルを繰り返すことで、人材育成に努めていく。

### 事業の成果

令和3年度、任意団体「やっちょろ保健室」運営協議会は約1年間のニーズ調査の結果、2か所で定期的に活動を行い、仮設住宅での活動も行った。令和4年度も2か所での定期的な活動を継続でき(利用者のべ135人)月に1回2時間の活動で、毎月平均16人の利用があった。また、現在も利用者は増加傾向にある。そして、任意団体「やっちょろ保健室」運営協議会は令和4年8月に一般社団法人看護のココロ(非営利団体)を設立した。

お世話役「ささえびと」としては、延べ46人の有償ボランティアが参加し、看護師や保健師が中心となって活動している。組織体制の見直しや今後の方向性についての話し合いが行われ、必要意義については広報活動を通じて地域住民の信頼を得ることができ、自治会や民生委員との連携も深まっている。さらに、法人設立時のシンポジウム開催、ホームページ作成、熊本県立大学との協力による論文作成、動画や音声配信、メディアでの発信なども行われ、地域での支援をより広げることができている。



### 対象者やコミュニティの変化や成長

この取り組みは、地域のお世話役(医療従事者やボランティア)、高齢者、そして地域住民(特にキーパーソン的役割の方や民生委員、自治会長など)を対象にしている。地域住民の調整役として、地域のリーダーやお世話役と協力して周知活動を行い、同じ方が利用することで日々のモチベーション向上や維持につながった。また、お世話役「ささえびと」との定期的な関わりは、体調の異常の早期発見につながるだけでなく、様々な事例に触れることで医療専門職が「関わり方」を学ぶ機会にもなっている。

### 見えてきた新たな課題・次のステップ

地域住民との信頼関係を構築するため、人材発掘と育成が最も重要であることを再確認する。今後は教育機関との連携を図り、研修プログラムを作成していく予定。また、健康に関する問題は可視化が難しいため、専門家と協力して支援の可視化を進めていく。そうすることで、まずは「やっちょろ保健室活動」のモデル化を目指す。このモデルを基本として他の地域でも活動できるようにしていく。引き続き、民間のボランティア団体として活動するが、行政機関との役割が重複することがあるため、団体としての立場や連携方法を図にして明確に伝えていくことが必要である。

### 伴走者より

「ささえびと(チームささえびと)」の実践は、有する専門性や提供する機能があることで、地域の人にとっても、安心して関わって相談ができ、もともとの専門や領域、機能を越えて、だんだん日常生活の中での困りごとの相談にも広がっていったり、地域の人材や社会資源とつないだり、支え合いの網の目を細やかにしていく、そんな地域への関わり方のモデルを示すものだと思います。学術的な観点から分析し言語化する取組みは、実践からモデル化のプロセスを示しています。「看護とは、患者と看護師それぞれが互いに学び、成長していく人間と人間の過程である」との言葉は、支えあうコミュニティづくりの大切なものを教えてくれていると思います。(河合 将生)

## 支えあってみんなで子育て



### 子育てネットワーク「縁側moyai」 (一般社団法人 子育てネットワーク「縁側moyai」)

2013年に発足した、子育てママによる相互支援ネットワーク。情報配信者数589名(2023年2月現在)。

活動内容としては、子育てサークル活動(年100回程度)・農業体験や木育事業(年20回)・情報配信(随時)・子育て口コミサイト運営・地域食堂・コロナ禍の飲食店/農家支援の共同購入(2020年度実績:34店舗/737人参加/総額約256万円)・災害支援(熊本地震、県南豪雨災害)・ひとり親支援等を行う。



### 事業概要

熊本都市圏では県外からの転入者や核家族も多く、子育て家庭の孤立が課題となっている。コロナ禍で子育て支援関連施設の休館やイベント中止等が相次ぎ、親子で出かける機会が激減したり、保育園・幼稚園や学校行事の中止や開催規模の縮小等で保護者間の交流機会が減るなど、子育て世帯の孤立は一層深まっている。当団体の子育て世帯からも、日々の子育て負担に対し悲鳴にも近い声が多く寄せられる現状にある。

コロナ禍でさまざまな活動が制限される中、当団体でもSNS等オンラインツールの活用や運営スタッフの増員等で支え合いや交流、相談の場作りを模索してきたが、更に多面的な支援、交流機会の創出が大きな課題である。

### 取り組んだ課題・目指すコミュニティ

コロナ禍に左右されない強固な支援環境を作ることで、より多くの子育て中のママ達と繋がり、さらに寄り添った支援やネットワークづくりができる。また、将来的には、地域や世代を超えた繋がりやネットワークを構築し、社会みんなで子育てできるような環境ができていく。

### 事業内容

- 団体運営を持続可能なものとするため団体を法人化し、専門家の助言のもと団体組織基盤の強化を行う。
- 団体の運営ビジョン・ミッションを共有し、活動を支援してくれるボランティアの負担を軽減し自発的に活動を支援してくれる体制整備を行う。
- 「縁側開放プロジェクト」を開催し、参加予約不要で子育て世帯が自由に交流ができる場を提供する。
- 子育て支援団体との連携について、県内および県外の子育て支援団体とのネットワークを作る。
- 団体紹介動画と冊子を作成し、子育て世帯および活動を応援してくれる方々など、幅広く団体の存在を知ってもらうためのツールを作成する。



【きてきて】



【子連れワーキング】



【子育て相談室】

### 事業の成果

2013年から10年間任意団体として活動してきたが、団体運営を持続可能なものとするため非営利型の一般社団法人格取得を目指し、専門家の助言のもと会計部門や定款・規程類等を整備し組織基盤の強化を行った。そのなかで団体の運営ビジョンを共有し、活動を支援してくれるボランティア「ゆいまーる」が負担を感じることなく、やりがいを持って活動に関われる組織体制の整備に努めた。

「縁側開放プロジェクト」として安全対策などの拠点整備を行い、毎月5のつく日を「きてきて」の日と設定し、コロナ禍で周囲との関係性がより一層希薄化したママ達が予約不要で自由に参加できる居場所作りを行った。また、ゆいまーるが子どもを連れてmoyaiに関する事務作業等ができる「子連れワーキング」を並行して実施した。

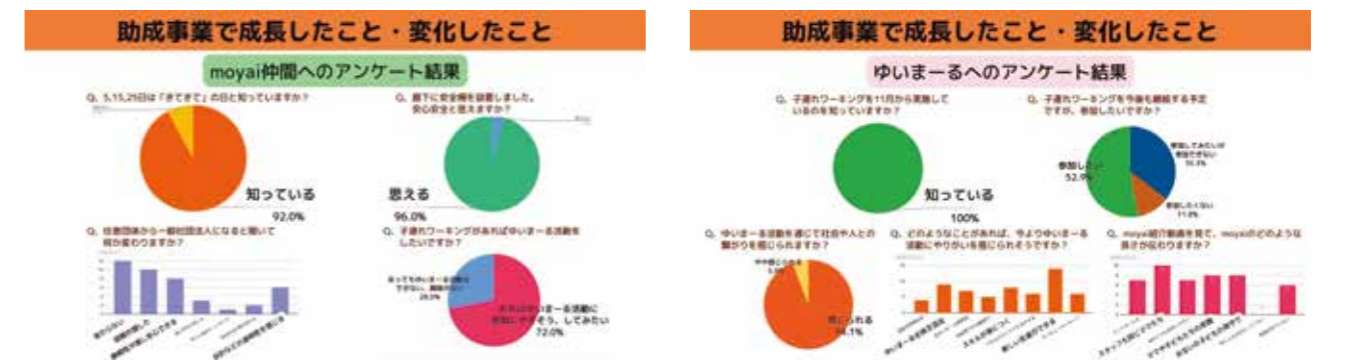
子育て支援団体との連携について、熊本県内の団体を視察し今後連携していく関係性を築くことができた。今後は県外の団体とも積極的に連携体制をとっていきたい。

団体紹介動画と冊子を作成し、子育て世帯や支援者(ボランティア、企業、行政など)へ効果的にアピールできる広報ツールを得た。これらを用いてより多くの子育て世帯へ縁側moyaiというネットワークがあることを知ってもらい、孤立・孤独を感じることなく皆で子育てできる環境をつくっていきたい。

### 対象者やコミュニティの変化や成長

設立当初は自然と「寄り添い補い合う」という関係性のコミュニティが成立していたが、団体の認知度が高まるにつれて会員が増え、いつしか支える側、支えられる側という線引きが生まれ、そのことが支える側であるボランティア「ゆいまーる」の疲弊をまねいていた。休眠預金活用事業をとおり、団体のビジョン・ミッションの共有をまず運営メンバーで行った。運営基盤の強化をし、法人化することで今後も持続可能な活動ができる体制を整えることができた。

会員に向けたアンケートでは「法人化することで会の信頼性が高まった」「安心して活動に参加できる」といった声が多数寄せられ、「寄り添い補い合う」持続可能なコミュニティの基礎部分が出来上がった。



### 見えてきた新たな課題・次のステップ

団体基盤をさらに整え、同時に会員への団体ビジョン・ミッションの共有をより一層進化させていく。4月から法人としての活動をスタートさせるが、法人化したからと言って団体そのものは何も変わらない。そのことを会員へ周知し、寄り添い補い合う関係のもと、子育てが辛いものではなく、楽しいと感じられるような活動を今後も継続して行いたい。今後は活動資金のなかから家賃、光熱費、通信費等の固定費を捻出していく必要があり、寄付・協賛を幅広く募りその体制づくりも整えていく必要がある。

「みんなですれば、つらさ半減!楽しさ無限!」子育て世帯へそう感じてもらえるような居場所を、皆で一緒に作っていききたいと思う。

### 伴走者より

これまで何度か課題になりながら、なかなか進められなかった団体の基盤強化・組織運営・事業の見直しを、コロナ禍の大変な中、9カ月かけて実行されました。メンバーで共有・役割分担しながら進めていく体制はこれからも団体の財産となると思います。コロナ禍で、孤独になりがちな子育てママたちの居場所づくり、県内・全国とのネットワークづくりは「安心して子育てができる場がある、ひとりではない、相談できる仲間がいる」大事なコミュニティになっていくと思います。法人化により、組織としての判断や選択をしながら、今後も「子育てママさんたちのつながりや場づくり」を持続可能な活動としていかれることを期待しています。(宮原 美智子)

## 官と民が協働で子ども達を真ん中にした 地域共生の居場所づくり



### 子ども支援活動ボランティアグループゆめの絆∞わらびかみ(童神) (NPO法人わらびかみ)

天草は少子・高齢化が進んでおり、「子どもを真ん中にした地域共生、地域で子どもを育み見守る」という考えが必要と感じ、学校・行政・市内企業・地域など様々な主体を巻き込み情報を共有しながら、①制服リユース活動、②児童養護施設訪問、③ひとり親世帯の子ども達の自立・学習支援、④子ども食堂・フードパントリー活動の運営等を実施している。また、必要に応じて支援機関等へも繋げている。



### 事業概要

困りごとのある世帯が増加しており、地域で子どもたちを育み、子どもを真ん中にした居場所づくりを推進するため、官民との連携が必要である。地域や企業、農家などからの寄付食材を受け入れ、各居場所に必要な食材を提供するための支援体制の構築が急務となる。そこで、天草管内の子ども食堂や居場所活動団体でネットワークを結成し、新規の子ども食堂等の開設支援や持続可能な運営をしていくための支援を開始し、窓口となる当団体の組織強化や啓発活動を行う。あわせて、子ども・地域食堂の開催や各居場所での相談活動を、高齢者ボランティアと共に行うことで、子育て世帯の支援のみならず高齢者の「生きがい、やりがい」に繋がるよう取り組んでいく。

### 取り組んだ課題・目指すコミュニティ

コロナ禍により全国のひとり親世帯収入が34.9%減、金銭的な困窮率が増している。また、必要な食料や衣服を買えない等がひとり親世帯で23.1%増となっている。当団体においても2020年の新型コロナ蔓延に伴い、子ども食堂の実施が厳しくフードパントリーを毎週実施した。支援件数は88世帯→120世帯に増えている。

天草は広域であるが、子ども食堂の数が6団体しかなく、団体間や地域コミュニティとの連携が脆弱。支援が必要な家庭に必要な情報が行きわたらず、子ども食堂等を利用したくてもできない状況が生まれている。目指すべき地域コミュニティとして、地域に潜在するサポートが必要な家庭に手を差し伸べるため、行政や地域、あらゆる主体と連携してオール天草での地域共生のネットワークとなる。

### 事業内容

- ①困りごとを抱える親子をサポートできるようにするため、団体を法人化(NPO法人)し、HPを作成した。FacebookやInstagramも開設し、情報発信も今まで以上にいった。
- ②官と民が協働で支援を行うネットワーク「天草こども未来ネットワーク結の手」の構築。オール天草で子ども達の様々な困りごとに対応できるように、天草市役所の子育て、福祉、教育関係部署社会福祉協議会や商工会等へ連携の打ち合わせ実施した。
- ③天草管内で困りごとのある子ども達の居場所を増やすため、まだ居場所がない町のキーパーソンを見つけ、新規居場所開設サポートを実施した。新和町、五和町の2カ所新たにプレイベントとして簡易的な子ども食堂が開催され、わらびかみも出張サポートを行った。



天草こども未来ネットワーク

結の手  
Yui no Te



### 事業の成果

組織強化として、法人化(NPO法人)をし、ホームページやSNSで情報発信頻度を高めることができた。書類等の整備も行い、団体内において実務担当の明確化を行えたことで、今後は事業を円滑に進めることができる体制を整えることができた。また、「天草こども未来ネットワーク結の手」を設立したことで、行政との連携を構築することができ、今までは子育て関係の連携のみであったが、これからは教育や福祉など他の分野においても窓口を広げることができる。

行政以外にも、将来的な地元の市民団体や企業との連携の足掛かりを築くことができ、オール天草での支援ネットワークの最初の一步を構築することができた。居場所事業の拡大については、まだ居場所事業を行っていない地域の中で5カ所から相談があった。そのうち、2カ所については実際に簡易的ではあるがイベントを行うことができ、今後もサポートを行うことで本格的な活動をしてもらえる流れとなった。



### 対象者やコミュニティの変化や成長

- 行政、地域の方々に拠り所、SOSを出せる居場所と周知されている。
- 「困っている親子を喫緊に対応してもらいたいので貴団体の活動を紹介したい」という声が増えた。
- 地域の方々から「ボランティアとして自分にも何かできる事があれば」「自分の地域の為にできれば手伝いたい」という問い合わせの声が増えている。
- 企業、地域の方々の応援が増えた。

### 〈利用者からの声〉

- わらびかみの活動を知り、支援を受けることになりとても助かった。
- パントリーのお陰で生活が少し楽になった。ありがたく感謝している。
- 精神的、経済的にも助かり、相談できる居場所として、とても心強い。
- ひとりじゃない!と思えるようになった。
- 困ったと言える人、居場所ができた。

### 見えてきた新たな課題・次のステップ

事務スタッフの確保と資金調達課題。SNS等で広く人材募集を行い、年に数回の研修等を行うことで事務スキルアップを行う。資金調達については、今まで寄付をしていただいた方を中心に継続的な支援依頼を行う。

今回、法人化したことで更なる活動を進める体制が整ったことを周知し、当団体の活動に共感していただけるよう呼びかけていく。

「天草こども未来ネットワーク結の手」においては、フードバンク拠点として認定してもらえるよう、実績と体制整備を行う。官民連携のネットワークも、より具体的な活動や連携内容を定め、連携先の拡充と深化を行い、天草管内の困りごとのある親子やそれを取り巻く環境を改善する体制を強化していく。

### 伴走者より

コロナ禍で困窮した子ども世帯への支援に追われる中、天草という地域性を考えたフードバンクシステムの構築・天草管内のネットワークづくり、サポート体制の構築にチャレンジされました。そして何より持続可能な活動を続けるために、この事業を通して、多様な構成メンバーによる法人化・基盤強化をされたことにより、団体の大きな成長につながりました。新型コロナ感染拡大が収まらない中、メンバーと役割分担しながら本当によく動かれたと思います。「1人の100歩より、100人の1歩」今後も天草の多様な主体の皆様と連携しながら天草の子ども達を見守る体制作りや活動が広がっていかれることを期待しています。本当にお疲れ様でした。

(宮原 美智子)

# 未来輝く！ いのちを慈しむハイブリット包括的性教育と相談事業



## NPO法人せいしとらんし熊本

2019年11月にNPO法人として認可を受け「だれ一人性被害者にも、性加害者にもさせない」という想いの元、性教育啓発活動を行う。  
**①性教育学習 ②性教育講師養成 ③性教育教材開発・作成・販売 ④性に関する情報提供の4つの事業を展開し、いずれも「だれもが正しい知識を学べる社会」の実現を目指している。**全国からお問い合わせ、相談、講座依頼があり、これまで延べ9000名を超える人々に包括的性教育の啓発を実施してきた。



## 事業概要

- コロナ禍における自粛生活の影響などによる性的トラブルを予防するため、熊本県下の小学生がオンラインとオフライン(ハイブリッド)で包括的性教育を学び、安心して相談できる窓口を周知することで、ひとりだけで悩む人が少なくなるよう環境を整える。
- 「子どもに性教育をどうやって伝えたらいいかわからない」といった声が多く、熊本県下の小学生とその身近な支援者、保護者を対象に実施。性教育に関するニーズや思い、課題を明確化できるようアンケート調査を実施し、可視化する。



## 取り組んだ課題・目指すコミュニティ

- 自分の身体や気持ちの大切さを知り、自分を守る方法を学びあう。
- 子どもや保護者、支援者が安心して生活できるよう、身近に感じられる相談窓口の設置。
- 保護者の性教育へのニーズを明確化し、今後の活動に活かしていく。
- 子ども達にとって身近な場所や子ども達に関わる支援者に、包括的性教育を伝えていくことで連携を取り、「性に関わる専門機関が共に協力・連携し合いながら子どもの成長を見守る社会」を目指し、地域での性教育ハブ拠点としての土台作りを目標に取り組んだ。

## 事業内容

- **包括的性教育の啓発**
  - ・ 性教育絵本(3冊セット)を無料配付  
希望された各箇所にて読み聞かせやお話会を実施
  - ・ 「親子で学ぶ性の学びサイト」の開設
- **相談事業**
  - ・ 公式LINEの開設
  - ・ フリーダイヤルの開設
- **実態調査**
  - ・ 支援者向けの性に関するアンケート実施(紙面)
  - ・ 保護者向けの性に関するアンケート実施(オンライン)



## 事業の成果

### ● 包括的性教育の啓発

- ・ 絵本の配付は、子ども食堂17か所、児童発達支援事業所94か所、学童保育施設(育成クラブ) 53か所、小学校26か所、その他、図書館へ配付し、読み聞かせやお話会は30か所で開催。
- ・ 子ども達へのアンケートでは「こんなパーツがあったなんてしらなかった。だからもっと知りたくなりました。」「もっと体を大切にしたいです。また聞きたいです。」「プライベートパーツを人に見せていけないことを知りました。」などの感想が寄せられた。
- ・ 支援者や保護者からも「小3の娘に生理のことを聞かれたが、具体的に伝えていいかわからなかった」「もっと話を聞きたい。」などの相談や感想が寄せられた。
- ・ 「親子で学ぶ性教育サイト」へのアクセス数…1500回

### ● 相談事業

- ・ 公式LINE登録者数…116名
- ・ フリーダイヤルの利用件数…5件

### ● 実態調査

- ・ 支援者向けアンケート…194名
- ・ 保護者向けアンケート数…188名



## 対象者やコミュニティの変化や成長

絵本の配付や読み聞かせ・お話会を実施し、子ども達が体の大切さや、気持ちの伝え方に気づき、包括的性教育の必要性を感じたと沢山の喜びの声があった。保護者からは「絵本を使った方法なら私にもできそう」などの感想が寄せられた。絵本配布時、お話会時に多くの相談が寄せられ、相談を待つだけではなくお話会をすることで、支援者や保護者自身が性教育に対する思いやニーズを再確認し、相談できる安心感に繋がっていた。

私たちも地域の性教育団体としての認知度が上がり、団体内の協力関係が進み、小学校の校内研修や子ども達への性教育講演依頼も増えている。

## 見えてきた新たな課題・次のステップ

アンケート結果をもとに関係機関に働きかけ、保護者と支援者(教育機関)との性教育に対する意識の差を少しでもなくすことが課題。電話やLINEでの相談に繋げるには時間が必要だと感じる。お話会で直接会うことで支援者、保護者、子ども達も安心して、気持ちの表出や相談に繋がった。今後、学習相談事業の充実を目指し、待つだけではなく予防的な関わりを強化するとともに、必要な子どもや家庭に支援が届くようプッシュ型支援、アウトリーチ型支援を実施していく。継続的な学習会、相談会を実施することに前向きな学校もあり、訪問型活動の土台作りを力を入れていきたい。

## 伴走者より

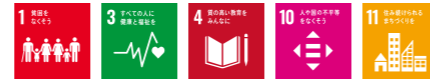
絵本の読み聞かせを入口に「アンケートの実施」、「相談窓口のツールや場の設定や整備」など、短期間に、団体内で情報共有・協力し、メンバーで役割分担しながら進めていかれたことが、団体の基盤強化や活動の周知につながったと思います。これまで開催してこられた養成講座受講生やそれぞれのネットワークを生かした絵本配布・読み聞かせ活動は、さらなる団体の活動周知にもつながりました。

コロナ禍の中、性教育の取り扱いには非常にセンシティブですが、「命を大事にする包括的性教育」という切り口で広がっている活動を、今後も様々な主体と連携しながら広げていかれることを期待しています。

(宮原 美智子)



## すべての子どもたちに 安心できる居場所と生きる力を



### 認定NPO法人NEXTEP

2000年学生中心の任意団体として活動をスタート。現在は認定NPO法人として熊本県合志市を拠点に、子ども、若者支援の各種取り組みを展開。主な事業として「不登校サポート事業」「医療的ケアや重い障がいのある子どもたちの在宅生活支援事業」「若者の就労サポート事業」など。多くの人と出会い、共に考え、行動していくことを活動の土台と考え、地域の個人、企業などとの連携を大切にしている。



### 事業概要

NEXTEPとして不登校サポート事業(2005年～現在)などを続ける中で、子どもたちが「学校に行けるか」「どんな進路を進むか」といったことよりも、将来の自立に向けて、希望や、楽しみを持って充実した暮らしを出来るようになることを目標の軸にしたいと考えようになった。

今回の事業では、子どもたちに安心できる居場所や生きる力を得ていく機会を増やすことを目指し、①子どもたち、若者たちが社会に出ていく過程を応援する個人ネットワークづくりと伴走支援。②福祉的就労や親を頼れない若者を支えるシェアハウス開設。③サポートが必要な子どもたちと接点となる学習支援や子ども食堂などを実施した。

### 取り組んだ課題・目指すコミュニティ

ひきこもりなどを経験した子どもたち・若者たちの背景はそれぞれに違うが、共通して他者との交流でしか得られない体験がどうしても不足してしまう。結果として、“将来”に対してポジティブな認識をはぐくむ機会や、家族などを超えて様々な形で自分を応援してくれる友人、先輩、大人と縦横につながる機会が不足してしまう。

当事業では、家族や支援者という枠組みを超えて、みんなで支える「子ども・若者応援コミュニティ」をつくることを目指した。コミュニティは【個人】ベースで、【自らが楽しいこと】や、【気楽さ】を共通コンセプトにすることで、ゆるやかに楽しく、でも続いていくコミュニティを目指している。

### 事業内容

さまざまな困難を抱える子どもたち・若者が、生きる力を育んでいく地域環境づくりを目指して、以下のプロジェクトを実施した。

- ① 伴走型の子ども若者応援ネットワークづくり
- ② 職業体験の実施…自分の将来を意識し、考えられる機会の提供。
- ③ 学習支援…小中学生対象で大学生ボランティアによる運営。
- ④ 子ども食堂…ひとり親世帯のほか、経済的な難しさを持つ世帯を主な対象にした食支援と接点づくり。
- ⑤ 若者の自立応援シェアハウス…福祉就労の若者や、親に頼ることが出来ない若者などが自立に向けて利用できる応援付きのシェアハウス。



### 事業の成果

- ① 伴走型の子ども若者応援ネットワークづくり…35名のネットワークを構築。定例会としての焚火の会を3回実施(1月末現在)。
- ② 職業体験の実施(パティシエ体験) …1回開催 参加4名
- ③ 学習支援…4回開催。延べ4名の参加。  
学校を休んでいた小学生が、学習面での自信をつけて学校に行き始めることにつながった。
- ④ 子ども食堂…お弁当配布、食料配布含め計10回。延べ192名の参加。社会福祉協議会等地域の支援機関とも連携しながら、子どもたちとの継続的な関係性を築くことができた。
- ⑤ 若者の自立応援シェアハウス…合志市内に民家を借り上げリフォームを完了。定員5名。18才～25才男性を対象にしたシェアハウスを整備完了。2023年3月から1名の受け入れ予定。今後継続的な暮らしを支える場として稼働していく。

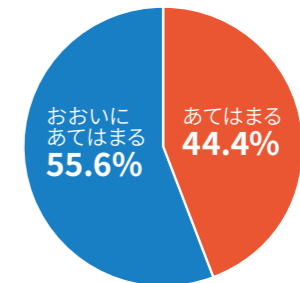
#### 焚火の会 アンケートより

- ・ 思いを共有できる方との繋がりを嬉しく思いました。安心できる場所です。(保護者の方)
- ・ その場所に安心できる人がいて、自由に気軽に話ができる安心感が、とても心地よかったです。(学校関係者)

など

参加した方)あなたの気持ちがすこしでも楽になったり、明るくなったりしましたか?

9件の回答



### 対象者やコミュニティの変化や成長

子ども若者応援ネットワークの定例会「焚火の会」では、子ども、若者本人にとっては、家族以外と出会い、視野を広げたり安心できる場となった。また、お子さんの不登校状態に悩む保護者の方が参加者同士の会話の中で安心されるシーンなどが生まれている。コミュニティの在り方自体も、「支援」「応援する」といったスタンスではなく、まずは「今を楽しむ」「こころが軽くなる」ことをお互いに実現する場となった。このことは結果として関係性のある子どもたちにとっても良い影響があると考えている。

### 見えてきた新たな課題・次のステップ

- ③ 3年、5年、10年と【今を楽しみながら関わりを続けていく】というスタンスを定着させ、息長くこのコミュニティを継続しながら子ども・若者を応援すること。
- ④ 子ども若者応援ネットワークの波及。ただし、自ら主宰する活動量を増やすことではなく、休眠預金助成事業や地域のNPO、個人の取り組みなど既に生まれている【支え合う多様なコミュニティ】をクローズアップしたり、コミュニティ同士の交流を通して互いをエンパワメントする関係性を育む。結果として地域全体の支え合いの力を上げていくことを目指す。
- ⑤ 「仕事」の見学や体験が出来る選択肢をつくっていくために、企業や事業者の方との接点を増やし、連携を模索していく。

### 伴走者より

子ども、若者の生きづらさや困りごとに寄り添い、職業体験や住まい、子ども食堂、心のケアなど、これまでの事業をさらにきめ細かく支える取り組みは、誰も取り残さない社会づくりとして、その一人の人生に大きな影響を与えることとなります。前半は事業の進捗に悩んだ時期もありましたが、様々なチャレンジを通して、スタッフの皆さんと団体の成長により、福祉の分野に楽しさや若者のニーズをしっかりと見つめる機会から新たな価値の創造を行うことができました。

個を大切にしながら、個と個をつなぎ、そのプラットフォーム的な役割になることで、困りごとを抱える若者の第三の居場所となるととても大切な存在となります。物理的にも心理的にも安心安全な居場所がさらに充実し、それを支える仕組みづくりが広がることを願っています。

(中村 賢次郎)

## 南阿蘇を「もっと好きに、もっと元気に」 地域まるごと事業



### 株式会社 南阿蘇ケアサービス

当社は1999年に設立、翌年に認知症グループホームを開設し、23年が経過した。2019年には村内唯一の障害者福祉事業も開始し、2022年度、新たに農福連携の加工所を設けた。2023年現在、事業所数は10カ所、職員総数は100名となった。また、児童発達支援事業所、放課後等デイサービス(療育部門)も開始した。来年度、介護予防に焦点を当てた健康づくり部門に、地域食堂にも活用できる地域交流カフェの複合型施設を開設予定である。



### 事業概要

南阿蘇村の高齢化率は2022年3月時点で43.1%と県の平均を大きく超え、高齢者のフレイルや社会的孤立が危惧されている。また、2016年に起こった熊本地震では、当社が災害拠点としての役割を担った経験からより密なコミュニティの構築が必要と感じている。これまで、当社が行ってきた介護や福祉のケアを求めている人にサービス提供を行う従来の形から、複合型施設を拠点とし、運動・栄養・社会参加へのアプローチを中心とした教室やイベントを展開することで、地域住民にアウトリーチし、Formal、Informalをこえた切れ目のない相互支援、シームレスケアの実現を目指した。

### 取り組んだ課題・目指すコミュニティ

南阿蘇村には子ども食堂もユースセンターもないため、多様な人たちの集まれる場の不足を課題とし、その必要性を感じていた。村の中心部にあり立地条件も良い住民の馴染みの場に複合型施設を開設し、定期的に運動教室(運動)、地域食堂(栄養)・イベント(社会参加)の3方面にアプローチすることで、それぞれの利用者が自ら「行きたい!」と主体的に集う場、健康相談や悩みなどをいつでも相談できる場としての機能や地域課題を皆で解決できる場所を目指した。乳幼児から高齢者まで、【ケアの先手を打てる関係性を構築】し、主たる対象者だけでなく参加・協力や繋がりを創出するコミュニティづくりを目指した。

### 事業内容

今年度に建設が予定されていた複合型施設は、ウクライナ情勢の問題で着工に遅れが出た。そのため、村内の施設等を借りて、運動については週1回の教室を開催し、自分の体組成が可視化できる機器を導入することでモチベーションの向上に繋げ、体力の維持・改善やフレイルの改善に取り組んだ。栄養については、南阿蘇食堂と称し、誰でも参加できる地域食堂を月1回開催することで、孤食の改善や居場所づくりを行った。地域食堂と同日にテーマの異なるイベントを月1回、開催することで多世代や同世代の参加者の交流(社会参加)にも繋がった。

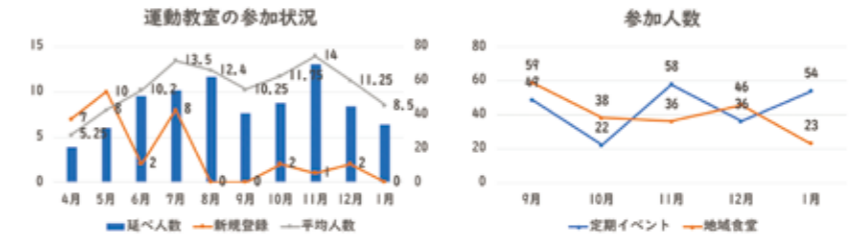


### 事業の成果

運動教室やイベントの参加状況は図の通りである。運動教室では徐々に参加者が増え、イベントでは内容によって参加人数のばらつきがあった。運動教室や定期イベントでアンケートを取った結果、「とても満足」や「よくなった」「推薦したい」など好評な意見が多かった。

第4回、第5回では、参加者に対して、ソーシャルキャピタル指標を調査した。その結果、市民参加得点は0.8/5点、社会的凝集性得点は2.5/3点、互助性得点2.9/3点であった。この結果から、コミュニティへの信頼や愛着、互助は十分に高い一方で、特に30～50代は社会参加が少ないことが明らかになった。

地域食堂の仕組みとして、村内の農園から野菜や卵は購入し、どこの食材を使用したか、参加者に伝えることで農家と参加者の繋がりがや食育を意識した取り組みを実施した。またフードロスにも繋がった可能性がある。



【運動教室 n=15】		
・ とても満足～満足	94%	
・ とても良くなった～良くなった	66%	
・ 他者に推薦した、推薦したい	87%	

【子育てイベント n=19】		
・ 大変満足～満足	100%	
【VR認知症イベント n=51】		
・ 大変満足～満足	95%	
・ 他者に推薦したい	98%	
【性教育イベント n=17】		
・ また聞きたい	70%	

### 対象者やコミュニティの変化や成長

アンケートでは「(運動教室で)体にも良くてお顔見知りができるのも楽しい」「地域を盛り上げる良いイベント」。「様々な食材を使ったお料理とってもおいしかった」との回答を得た。

定期イベントに2回以上参加した地域住民3名を対象にインタビューを行い、「子ども自体がイベントに興味があるか、そこに知っている人がいるかどうかは重要。変な団体ではなく、得体が知れているから行く。」「テーマによって来る人たちが変わるというのが逆に面白かった。」「最初の敷居が高くなく、毎回の内容が違い、全部に興味があった。そこで知り合いから友達になれたし、地域交流の場になっていた。」とゆるい繋がりが感じられる回答を得た。

### 見えてきた新たな課題・次のステップ

地域食堂や定期イベントの意図が十分に伝わっておらず、チラシについては「硬い」イメージとの意見があった。また、地域食堂の運営が生活困窮や孤食の方に繋がったのかは不明である。もともと外食の文化が少ない可能性や、交通手段がなく参加できない可能性もある。「困窮していないのにもらうのは申し訳ない」との意見もあった。

これらのことから、意図が伝わるように3月のチラシを工夫した。また、イベントの実施については少人数のグループワークが楽しいという意見から、住民と一緒に企画づくりをしていこうと考えている。今後の地域食堂の仕組みは、運動教室参加者を有料とし、それを財源に回していきたいと計画している。

### 伴走者より

世代、性別や国籍、そして時間を越えて人と人、もの、こころがつながるシームレスケアを目指した取り組みは、南阿蘇という地域の様々な課題に対応するために重要な役割を担うこととなります。事業の3つの柱である健康づくりの運動、栄養面から支える地域食堂、そして様々なイベントを通しての社会参加は、単なる参加者ではなく、参加者が支える立場にもなる仕組みを創りあげました。また各事業の参加者アンケートや評価を元に工夫と改善を繰り返し成長していく様子はこれからもさらなる事業発展が期待できます。何よりスタッフの皆様が元気に楽しんで参加者の方々と共に歩む姿は印象的でした。できることで支えあうコミュニティとしてこれからも活躍して欲しいと思います。

(中村 賢次郎)

## 高校生・大学生のキャリア形成を支援する コミュニティづくり



### 一般社団法人フミダス

山積する社会課題に対し「熊本をずっと暮らせるまちに」をビジョンに掲げ、地域を担う若者が育つ生態系を育むことを目的に2012年4月に設立。人材育成事業として熊本大学、熊本県立大学、北九州市立大学など県内外の大学や高校で行うキャリア教育プログラムのコーディネート及び講師、社会デザイン事業として行政と連携した県内企業に向けた採用力向上実践塾やイノベーションスクール、まちづくり事業や災害支援事業を行っている。



### 事業概要

コロナ禍でよりキャリア形成の機会を失っている高校生、大学1～2年生の課題を解決する取り組みを実施。事業実施エリアとしては主に若者の人口が多い熊本市、及び2年前の熊本豪雨災害で被害が大きかった人吉市で実施した。事業内容としては次の4つ。①高校生及び大学1～2年生をのべ100名を対象にしたキャリアを考え学ぶための研修及びインターンの実施。②高校生及び大学1～2年生を対象にしたキャリアを考え学ぶための研修及びインターンの開発。③産学官連携したキャリア形成のためのインターンの仕組みづくりのための定例の意見交換の実施。④コミュニティの形成の場作り。

### 取り組んだ課題・目指すコミュニティ

急激な少子高齢化や人口減少、IT化、グローバル化が進み、先が見えない不安定な社会の中で、就職活動前の早い段階でのキャリアを育む機会が求められているが、新型コロナウイルス感染の拡大により思うような活動ができず困難状況が続いている課題に対し、新型コロナウイルス収束を待ってからの対策でなく、就職活動前にキャリアの考え方を学び、より社会や会社・仕事と向き合う中で、自分自身がどうありたいのか、社会の中での自分の在り方を考えることができる機会をつくるのが急務と考え、産学官が連携し、地域で若者を育てるコミュニティの形成を目指した。

### 事業内容

「MyBeingインターンシップ」を設計し、高校生及び大学生が“ありたい姿を見出す”ことを目的としたインターンシップを実施。事前研修・課題解決型1dayインターンシップ・事後研修を通して仕事やキャリアについて深く考え、自分のありたい姿を見出していくプログラムを県内高校、大学や熊本県高校教育課とコミュニケーションをとり熊本県におけるキャリア教育の課題を共に考えながら実施した。人吉においては人吉市、球磨地域振興局、高校、商工会議所などが参加した意見交換会を行い他県や海外の事例から若者のキャリアを地域で学び考える場づくりを行い、今後は作った拠点を中心に活動する。



【事前研修の様子】



【インターンシップ受入れ企業研修の様子】



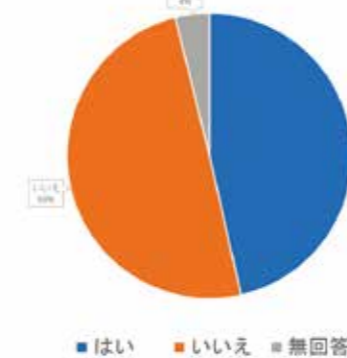
### 事業の成果

MyBeingインターンシッププログラムの参加者目標100名に対し414名(県内高校生398名+県内外大学生14名)が参加。

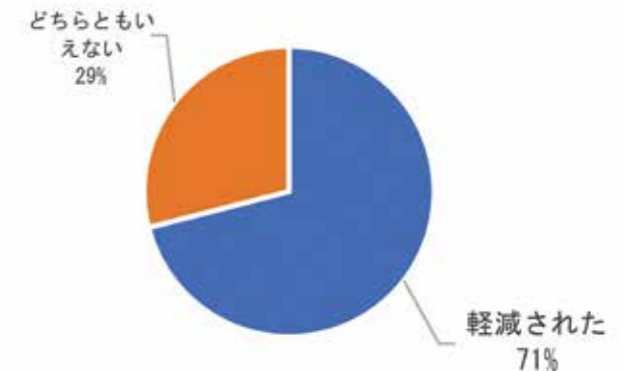
#### ●事業対象者の変化

コロナ禍で不安を感じていた対象者の不安がMyBeingインターンシッププログラムを通して軽減された。

将来の仕事について不安なことはありますか？



不安が軽減された



#### ●若者のキャリア形成を支えるコミュニティの構築

1社1組織への訪問と事業説明を通じて行政、経済組織、高校、民間事業者など熊本市内9組織、人吉市内7組織が連携しインターンシッププログラムを実行した。学生だけでなく受け入れ企業の研修や各組織が集まる意見交換会の実施など若者がキャリアを描く重要性和支えるコミュニティの必要性を考える場づくりも出来た。

### 対象者やコミュニティの変化や成長

MyBeingインターンシッププログラムを通して、参加した生徒が今の社会を学び、自身のキャリアを考えるきっかけを作った。これによりキャリアを考える上で「ありたい姿」を描く大切さを学んだ。実際にアンケートの中で「楽しいと思える仕事につきたいと思うようになった」「感謝されることが働く目的や成長につながるのだと思った」などの意見があり、進路選択が会社の規模や条件ではなく、自分を基準に仕事を選ぶことへと変化した。また参加した先生からも「学校だけでなく外部との連携によって地域で生徒を育てていくことが大切だということを実感した」との意見があり、若者を支えるコミュニティを変化させることが出来た。



【産学官意見交換会の様子】

### 見えてきた新たな課題・次のステップ

本事業を通して若者がキャリアを描く機会を作ることには予想以上に困難な状態にあることが分かった。変化する社会の中で国としてキャリア教育の推進が加速するのに対し、受け入れるべき教育機関や組織は追いついていない現状にある。次のステップとして、それぞれが単独で行うのではなく若者を取り巻く様々な機関や組織が連携し、地域全体で若者を育てる文化を作ることが重要である。本事業で作ることのできたコミュニティを起点として今後若者のキャリアを育成するコミュニティの輪を広げていく。

### 伴走者より

新型コロナウイルス感染症や世界の状況により、若者の将来への不安は大きいものがあります。将来設計としてキャリア教育を今回のテーマとし、高校生大学生に、学校、企業、行政をつなぎ、寄ってたかって若者の成長の機会を支えあうコミュニティづくりは、特に豪雨災害の被害が大きかった人吉球磨地域の方々に勇気と希望を与える機会となったことでしょう。事業を実施していったことで見えてきた新たな課題も掘り起こし、柔軟に対応することは事業の成果に大きく寄与しました。今回の事業をモデルとし、熊本各地の若者のキャリア教育の一助となることを期待したいと思います。(中村 賢次郎)

## 農福連携の経験を 地域コミュニティづくりにつなぐモデル事業



### 一般社団法人オルタナ

一般社団法人オルタナは、障がい者の就労と生活を支える自立した力を身に付けるために、2011年8月10日に設立され、障害者総合支援法に基づく障害福祉サービス事業、児童福祉法に基づく障害児通所支援事業を行っている。障がい者の就労支援では農業活動に力を入れていたが、事業としての困難を克服する必要が生じたため、自立訓練(生活訓練)事業に特化した「コミュニティの学校100年ボンド」を起こした。



### 事業概要

現在、少なくない障がい者が社会参加出来ない状況が続いている。それは、障がい者と社会参加をするための「居場所」とを結びつけるしくみがまだまだ不十分だからである。障がい者が誰に相談すればいいかわからないということも理由の一つ。これを解決するためには、結びつける役割の「相談支援」が必要だが、現在のフォーマルなしくみだけでは不十分である。私たちは、これまで取り組んできた農福連携の経験により、まず「居場所」となるコミュニティ農園を設け、「居場所」とのマッチングを担う「相談支援」のあり方について問い直そうと考えた。具体的には結び手のことを「相談支援者」と位置付け、ネットワークをつくり、さらに「拠点機能」となるプラットフォームを設けることにした。

### 取り組んだ課題・目指すコミュニティ

- 1 コミュニティ農園の開設をし、農業活動を通じて日常的に「生きる」力を養う「居場所」を作ろうと考えた。
- 2 困っている人をほっとけないと思う人すべてを「相談支援者」と位置付け、その養成のために「見えないものが見えるようになる講座」を開き、専門家ではないが複数の力を協働して困りごとを解決する支援者の集団を作ろうと考えた。
- 3 相談支援者が一堂に会し、相互に交流することが出来るよう「相談支援者ネットワーク」を結成し、そのプラットフォームとなる拠点機能を「コミュニティの学校100年ボンド」が担うこととした。

以上の課題を達成することで、障がい者の社会参加が継続的に進められ、地域コミュニティが生まれると考えた。

### 事業内容

コミュニティ農園については、対象となる耕作放棄地の地権者との契約が成立し、農業委員会の認可を経て、1月に具体的な圃場整備に着手した。有機農業を進めていくのに助言をもらう2名の専門家とつながった。

「見えないものが見えるようになる講座」を人づくり編(全5回)と微生物編(全15回)に分けて開催し、相談支援者の養成を図った。相談支援者の集団づくりについては、受講者を中心にネットワークを結成する見通しが立った。国の施策動向との連動も視野に入れていく。プラットフォームも動き出した。

事業に付随して、「シェアハウス」「コミュニティカフェ」「地域マルシェ」といった、新しいプロジェクトが生まれてきた。この事業が、地域にある困りごと(ニーズ)を普遍化し、新しい社会資源を創造する試みとなった。



## 事業の成果

### 地域福祉の主体形成

- 地域には様々なコミュニティがある。それらはやがて重なり合うようになっていく。その重なり合いの結節点がプラットフォームである。そこが、全体を束ねていく力を得ることが出来たら「地域の福祉力」となる。

### 福祉組織化の実践

- コミュニティの学校100年ボンドが指定事業所として安定し、相談支援者ネットワークが形成され、つながりを基にしたすそ野が広がり、フォーマル事業所とも連携を強くしていきながら、関わる人々全体の相互協働が深まっていけば、「計画的かつ積極的な福祉活動を行う福祉コミュニティ」へと成長していく。そのための基礎をこの事業のなかで確保することが出来た。



### 対象者やコミュニティの変化や成長

まず相談支援者の「養成」については、講座受講や個別の対話を続ける中で、「養成されるもの」ではなく「育ちあがっていくもの」であることが分かった。つまり、これからも活動を共にしたり、緊密なコミュニケーションを取り合いながら「関係」として浮かび上がってくるものだと理解される。

次に、困りごとを抱えた対象者の変化については、シェアハウスに入居した2名の生活改善と一緒に始めたが、目に見えて変化が見られる。また、コミュニティカフェでのわずか二月の「製造・販売」活動の経験では、関わるメンバーが役割を自覚し、それを総合していくことの難しさを感じながらも、コミュニティ実現の醍醐味を感じている。

さらに、コミュニティ農園の役割について、その独自性を見極めなければならないと感じるようになってきた。単に「いいことやっていますね」だけにとどまらない、社会的な役割を自覚しなければならないと感じるようになってきた。

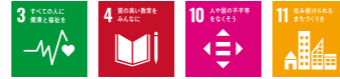
### 見えてきた新たな課題・次のステップ

- A コミュニティ農園では、専門家とつながり、CSA型農園(野菜園芸) + 馬場(観光農園) + 薬草園の圃場計画を立て、国の「みどりの食料システム戦略」に呼応した有機農業を追求していく。
- B 相談支援者の集団づくりについては、今結集している方たちを大切に、現在相談支援者と言える20数名の人に「橋頭保」となってもらう。相談支援者の活動を、国の「重層的支援体制整備」施策とリンクさせていく。
- C コミュニティ・カフェ事業は、製造・販売に傾注し、最終的には独立採算を目指す。
- D シェアハウス(ほんやら洞)は、新しい居住支援のスタイルを探求し、モデル事例に育て上げていきたい。
- E 支援記録は、「生きるを支援する」方法やケアの本質を明らかにしていく指標として活用していく。

### 伴走者より

“事業開始時には想定していなかった「事業に付随して新しいプロジェクトが生まれてきました」”。そこにオルタナさんの魅力と可能性が表れています。シェアハウス(共同生活の場)、コミュニティカフェ、地域マルシェ(井戸端を復活)といった、共同体感覚を感じ・呼び覚ます場を、事業を超えて創出し、価値を言語化しながら進めていく。制度の枠にとらわれない新たな位置づけをつくりながら、いろんな人の参加の舞台を用意し、コミュニティづくりのプラットフォームにつなげていく。本質を常に追求する姿勢と実践、言語化から多くの学びと刺激をいただきました。膨大な毎月のレポートも本質を掴む探求のプロセスの重要な営みだったと思います。(河合 将生)

## もう一度繋ぎ直す、 廃校活用したおもやいの居場所作り



### 一般社団法人sol

『福祉から世界平和へ』を理念とし、森のようちえんや障害児通所支援事業所、不登校児支援、保護者支援を事業の中心とし、障がいがあるなしに関わらず、赤ちゃんから高齢者まで、どこで生まれたかなど関係なく、今ここにいる人たちが互いに支え合うごちゃまぜの場づくりを目指している。



### 事業概要

コロナ禍で育てにくい子や不登校の増加とそれに伴う親の負担増、交流の場の減少により高齢者や引きこもりがちな人の運動不足や更なる孤立化を受け、次世代の担い手不足であった阿蘇フォークスクールにおいて、障がいの有無や年齢、住む場所に関わらずごちゃまぜに集える場づくりを行った。阿蘇フォークスクールとの話し合いを重ね互いの想いを伝え合い、地域の人が集まりたくなる仕組みや療育の先進事例の視察を経て、発達に気になる子のための「そだちの保健室」、運動不足や孤立状態にある人の心身の健康増進を目指す「コミュニティズム」、多様性を受け入れ人と関わる喜びを感じられる「コミュニティスペース」の3つの場づくりを行った。

### 取り組んだ課題・目指すコミュニティ

阿蘇フォークスクールは、取り壊される予定だった小学校を地域の有志により存続させている経緯があることから、地域の想いを受け継ぎこの場所を大切にすること、同じ想いを持つサポーターと共に「LAKべる」がより多くの人の心のよりどころとなるよう運営することを心掛けた。今後は、地域の人やここにに関わる人が支え合う仕組みづくりをすること、赤ちゃんから気軽に発達にアプローチしたり不登校の子が自分を好きになれるようにすることで親子ともに負担を軽減し家庭での笑顔が増えること、会話が苦手な人や一人でゆっくりしたい人、地域外の人にも来れる場所にし、障がい児や不登校児への理解促進だけでなく互いを認め合える社会を目指す。

### 事業内容

- 愛知の「ソーネおおそね」、岐阜のNPO法人はびりすを視察し、地域コミュニティの仕組みづくり、感覚統合療法をはじめ療育全般について学んだ。
- 阿蘇フォークスクールと十分な話し合いを経て3部屋を改修。焚き火に木をくべる時のように楽しく集える場にしたと「LAKべる」と名付け、準備からオープンイベント、週1回（金曜日）の運営すべてをサポーターと共に行っている。また近隣の不登校児のための居場所「フレデリック」で雨天時も活動できるよう屋根改修を行った。
- 利用者の他、地域の方、法人既存事業関係者など51名へ、地域の支え合いの仕組みづくりのため日々の困りごと、自分ができることのアンケートの他、LAKべるの良さなどヒアリングを実施。



【そだちの保健室】



### 事業の成果

#### ●そだちの保健室

発達を促す遊具を備え、困りごとのある親子により早期にアプローチできる場。赤ちゃんから通える場を目指しており、早速乳幼児健診で発達が気になった親子に来ていただいた。

#### ●コミュニティズム

町の体操教室で講師を務める作業療法士監修の、心身の健康増進・介護予防を目的とする場。トレーニングマシン10台設置のほか、身体を無理なく動かすプログラム動画を作って活用しながら楽しく運動ができている。早くも常連さんが6名となり徐々に参加者が増える中、県の介護予防事業のポイント付与対象事業にも決まった。

#### ●コミュニティスペース

もともとあったカフェを活用して飲食提供をする他、イベント開催や貸スペースとして運用。赤ちゃん連れの方も来やすいようにキッズスペースも作った。早速ここへ来た幼い子を他の利用者が抱っこする姿など笑顔で交流する姿が見られている。

#### ●フレデリック

屋根が老朽化で雨漏りしていたため改修し安心して過ごせる場となった。教育委員会や学校から視察があり、大自然の近くで自由にのびのびと過ごせて不登校の子にとって素晴らしい環境であることをご理解いただき、今後の不登校児支援を協働で行っていくための体制づくりについて協議を進めている。



【コミュニティズム】



【コミュニティスペース】



【コミュニティスペース】

### 対象者やコミュニティの変化や成長

- 場づくり着手前の丁寧な対話でフォークスクールと法人が相互に理解し合えた。
- 視察をきっかけにスタッフ同士深いコミュニケーションがとれるようになった。
- サポーターに準備段階から関わってもらい、ミーティング、オープニングイベント、運営を共同で行うことでサポーターの主体性が高まりサポーター主催イベントも増え、支え合いの場づくりそのものにつながっている。
- 支援が必要な親子に早めに関わるのが可能となった。

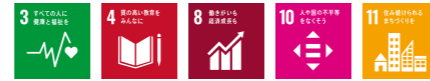
### 見えてきた新たな課題・次のステップ

2023年4月から地域おこし協力隊が入り、LAKべるは週4日（水～土曜日）オープンとなる。利用者と地域の人により良い関係を築きながらLAKべるが活用されるよう、パンフレットを作成して方針や心得を明記しサポーターとその内容について共有を徹底する。そのほか、支え合いの仕組みづくり、コミュニティスペースの利用方法、会話や交流が苦手な人にも来てもらうアイデアを考える。今後は地域との関係づくり、情報発信と対話に努める。

### 伴走者より

障がいがあるなしに関わらず、赤ちゃんから高齢者まで、集い支えあう居場所づくりを、多様な活動を通して展開しているsolさんは、理念や大切にしているあり方、それを伝える表現が魅力であり、組織と活動、関わりの基盤になっていると感じていました。だからこそ、事業のアウトプットとともに、実践の一連のプロセスを通して、法人内外に「助け・助けられる互いの存在と関係性」がつけられ、より幅広い地域住民との対話や信頼関係、参加・協力が広がったことは、みんなが楽しく焚き火をくべるように集うあり方を、事業・活動という枠組みを超えて具現化し、まさにそれが「廃校を活用したコミュニティ」を創出されたのではないかと感じました。（河合 将生）

## 社会資源に繋がれない外国人のための アウトリーチ型支援事業



### ワールドフレンズ天草

2013年在住外国人妻への支援のためボランティア通訳として集まった有志達で団体設立。民間の助成金を活用し、母子で集えるカフェや、日本の季節行事の会等を実施。参加者の話に耳を傾けるうち、相談ができる場と、日本語が学べる場が必要であることを痛感。相談対応、日本語教室を目的とした助成金の採択を受け天草地域全域で実施。助成金事業の実績とニーズが認められ天草市事業として予算化され事業委託されている。



### 事業概要

昨今のコロナ禍の影響で、外国人散在地域であるここ天草地域でも、在住外国人が帰国予定であるのに帰国できなくなったり、逆に新たに入学予定であった外国人が入学できなくなったりしている。

コロナ禍で日本に在住している外国人にとっては、収入減や雇用継続の不安定さ、また既にある社会資源に繋がれず本来提供されるべき福祉や支援策に繋がれず、より深刻な状況に陥っている方もおられる。

本事業で支援体制を強化し持続性のある支援の繋がりを目指し、在住外国人が安心して暮らせる環境を構築に取り組んだ。

### 取り組んだ課題・目指すコミュニティ

人口減や高齢化が急激に進む天草では、日本人も外国人も同じ地域を支える仲間として、お互いを大事にできる存在となっていることが必要不可欠である。

しかし、天草で暮らす外国人の多くはあらゆる場面でアウェイ感を感じている。髪や肌の色、言葉や国籍が違うことで、ジロジロ見られ居心地がわるかったり、知らない文化や習慣で不安に感じたり、心の繋がりが持てる友人や仲間が見つからず孤独や疎外感がある。

この事業では、地域の居場所や支援体制の強化をすることで、これまでの支援対象者が「支援されるだけでなく各人の能力を活かして活躍できるコミュニティ」づくりを行い、アウェイではなくホーム感を持てることを目指した。

### 事業内容

#### 取組①地域の居場所の創設

- 気軽に立ち寄り顔が見える場として孤立を防ぐ
- メニュー開発やイベントの実施、居場所のスタッフとして在住外国人や関わる方が活躍できる場
- 地域に向けての異文化理解のための場所

#### 取組②天草の遠隔地にも支援を届けるための地域サポーターを養成

- 座学と実技による支援員養成講座を実施
- 講座を受けた地域サポーターとの連携の仕組みを構築

#### 取組③在住外国人の労働や雇用企業に関する情報収集と整備

- 天草市の全在住外国人に郵送でアンケート調査
- 対面での聞き取り調査(人づてに紹介・地域で見かけて声かけ)
- 天草地域の企業に外国人の雇用状況について聞き取り調査
- 日本語教室での聞き取り



### 事業の成果

取組①「居場所づくり」の新しい仲間が増え、7月から毎週1回のスタッフミーティングを行った

- やるべきことを議論し、各々意見を出し合うことで方向性を共有することができた
- 運営経費を賄う方法を思案し、これまで団体でやってきた活動全体の見直しをおこなうことができた
- 地域の方や相談した専門家等を含め新しく関わりを持った方たちに活動を知っていただく大切さに改めて気づいた

取組②「地域サポーター講座」と「日本語ボランティア講座」を計6回実施、のべ67名が参加

- 20代～70代まで幅広い年齢層が参加
- 参加者の約2/3が当団体やその活動に参加するのが初めて
- 新しく7名が日本語教室のボランティアに加わった
- 参加者の91%が「外国人から相談されたら自分が出来そうなことなら動いていい」と回答があり、遠隔地支援の連携体制の構築につながった

取組③⇒これまでに集めた情報

- 外国人雇用企業数
- 働く外国人の個人情報
- 在留資格別人数
- 住所別外国人の人数
- 外国人雇用がある業種別企業数

対象外国人だけでなく企業や近隣自治体から外国人支援について相談いただく機会が増え、これまでなかった地域や分野にも事業の広がりをみせている。

### 対象者やコミュニティの変化や成長

地域の拠点づくりについては周囲を巻き込んで一緒に作り上げることを大切にしてきた甲斐あって、当初の目的以上に、対象者にとって、「自分が関わった場所」という感覚を持ってくれたようである。より積極性が生まれたメンバーも出てきているのが嬉しい。支援員養成講座を実施したことで、新旧の支援員どちらにも良い刺激が生まれ活性化した。外国人にとっては日本語教室で会う新しい日本人のメンバーが増え、純粋により楽しくなったようでよかった。

情報収集を行ったことにより、当事者が「自分たちの意見を聴いてくれる所があるんだ。意見や相談事を話してもいいんだ。」という意識を持つようになってくれたのは嬉しい変化であった。

### 見えてきた新たな課題・次のステップ

地域の拠点について、運営コストをカフェ経営で賄おうと計画していたが、実際に調べてみると、知れば知るほどカフェ経営はあらゆるビジネスの中でも利益を生むのが非常に厳しい分野であるということが分かった。そんな厳しい分野にあって、外国人と協力しながら、どのように工夫して安定的に運営していくのかは新たな課題であり、挑戦すべきステップである。支援員の方にサポートしてもらって行う予定のオンライン日本語教室の実施について、パソコンの操作が不慣れな方もおられるのでその部分の対応は課題である。情報整備について、収集した情報をどうアップデートしていくのか、手法についてより調査検討する必要があると感じた。

### 伴走者より

地域の居場所づくり、支援員や地域サポーターの養成、外国人雇用や就業情報などの情報整備に取り組まれる中で、丁寧にスタッフミーティングを積み重ね、当事者の声を聞き、関係者、協力者とのコミュニケーションを行い、困難にも直面しながら、プロセスの中で話し合いを大切に、参加・協力の機会をつくりながら誠実に進められたことが、らしさであり、強みであると思います。助け合いのつながりが紡がれ、期待や信頼が高まっていくことが、映像の一人ひとりの表情からもうかがえます。一人ひとりの顔が見え、愛する人・ほっとけない人がそこにいる雰囲気と組織文化が人を呼ぶ。そんな魅力と価値をますます高めていってほしいと思います。(河合 将生)



# 6 伴走支援について

## 実行団体基盤強化・事業実施バックアップ

### 【資金分配団体の役割】（資金分配団体募集要項より抜粋）

「包括的な支援プログラム」を企画・設計し、民間公益活動を行う団体（実行団体）に対して革新的な手法による資金の助成や経営・人材支援等の非資金的支援を伴走型で実施。これにより、民間公益活動の自立した担い手を育成する中心的な役割を担う。

### 【伴走支援】

#### 1. 募集期間から申請団体の伴走支援を行った

- ① 4月 5日（火） 14時～16時（オンライン）
- ② 4月 7日（木） 15時～17時（オンライン）
- ③ 4月 9日（土） 10時～12時（オンライン）
- ④ 4月12日（火） 19時～21時（オンライン）
- ⑤ 4月14日（木） 15時半～17時半（リアル開催@天草市市民活動センターあまみん）
- ⑥ 4月18日（月） 10時～12時（オンライン）

助成金説明会32団体参加

#### 2. 個別相談会 相談32団体 → 申請31団体

- ・募集要項に沿った形でできるだけ多くの団体が申請できるように、説明会の後、個別相談会を行った。（全団体実参加）
- ・事前に「事業計画書・資金計画書」記入の上相談する流れにしたことで具体的な相談ができ、結果的に31団体の申請があった。

日	団体数	相談内容
4月8日	2団体	<ul style="list-style-type: none"> <li>●申請内容が助成金の趣旨と合っているかどうか申請書に書く前の段階の、考えていることの整理</li> <li>●資金計画について内訳の相談 実際に記入した事業計画書、資金計画書を見ながら具体的にアドバイス（企画の全体像の確認・課題の書き方・資金計画書の確認）</li> <li>●事業計画下書き段階での相談・事業の整理 昨年度の休眠預金事業からの申請内容確認</li> <li>●予算の使い道について</li> <li>●提出書類について 等</li> </ul>
4月12日	4団体	
4月14日	5団体	
4月15日	5団体	
4月18日	5団体	
4月19日	8団体	
4月20日	3団体	



申請団体31団体

#### 3. 毎月の進捗管理・集合研修

◆ 実行団体に寄り添った研修やフォローアップ・アドバイスなどの丁寧な伴走支援

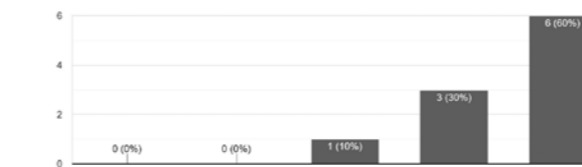
- ① マンスリーレポート提出・プログラムオフィサー定例会議、実行団体フォローアップ面談  
団体の状況に応じて、個別面談や団体訪問を行う
- ② 集合研修：2022年6月、10月、12月  
各四半期の事業報告、プログラムオフィサーや実行団体アドバイザーとの経営戦略会議
- ③ 最終報告会前のブラッシュアップ研修：最終報告会のプレゼンテーション、助成事業の成果評価など（2023年2月5日（日）熊本YMCAで実施）
- ④ 最終報告会：公開プレゼンを開催。（2023年3月5日（日）熊本市内で開催）

#### 4. 状況に応じたオプション伴走支援

- ① 「コミュニティカフェの開き方セミナー」 講師 五味真紀氏  
日時：12月12日（月）13時30分～16時30分 場所：100年ボンカフェ（一般社団法人オルタナ）  
内容：事例発表・相談会
- ② 共感と協力を高めるために必要な「アクションプランづくり」ワークショップ  
日時：2月11日（土）13時30分～16時半 場所：熊本県総合福祉センター  
内容：団体のビジョン・SWOT分析・優先すべき課題・資金調達・広報戦略づくり

### 【実行団体の感想意見（アンケートから）】

1. この事業で行ってきた毎月のフォローアップについて、満足度を教えてください。10件の回答



定期的に行ってきた研修（1回目：6/19、2回目：1..目：12/11）について、満足度を教えてください。10件の回答



（1:不満～5:大いに満足の5段階で評価）

### 毎月の伴走支援について

- ・丁寧にしていただきました。ありがとうございます。方向性の確認も出来ました。
- ・支えてもらった部分も大きいですが、特に動き出し始めの部分など、もう少し手厚い伴走を期待していた。
- ・定期で時間を持って振り返ることが出来ました。
- ・定期的に面談がある事で、原点に立ち返り新たな視座を得られることが出来ています。
- ・悩みがあった時など定期的に答えを頂けたり、活動の軌道修正ができて良かった。
- ・アドバイスが大変ありがたかった。
- ・勇気を頂いています。
- ・事業の進み具合のよいペースメーカーになった。

### 集合研修について

- ・大変でしたが、とても学びが多かったです。
- ・研修や交流会を通して、他団体の活動も知ることができ、それきっかけで連携も取れるようになったため。
- ・複数お会いして、交流会や懇親会の機会もあり、横のつながりがつくれたから。
- ・他団体からの学びは本当に大きく、仲間意識が高まってきているのがうれしいです。
- ・研修内容に関しては大満足。伴走支援の方々の意見が毎回とても参考になった。
- ・他団体の活動含め活動状況を整理するのにとても役に立ちました。

### 【成果と課題】

- 毎月の伴走支援と3か月ごとの集合研修・団体訪問を行うことで、実行団体にとって、定期的な振り返り・軌道修正を行うことができた。
- 集合研修で学び合い・交流することで実行団体同士、実行団体や資金分配団体・アドバイザー間で、連携が生まれ、事業全体が多様なコミュニティとなっている。実行団体の中から今後も続けたいとの声が上がっており、体制作りに向けて準備中である。
- 採択団体10団体という数の多さは、多様なコミュニティの交流や学びとなった一方で、所要時間を要するため、研修内容や時間構成に工夫を要した。
- 今回の実行団体の中には任意団体が4団体含まれ、そのうち3団体は法人化。1団体は今後法人化を目指している。任意団体への伴走支援は想定以上に細やかな支援を必要とした。
- 9カ月という期間での事業であり、事業期間内でもコロナ感染拡大が収まらず、居場所物件取得や工事期間の延長があり、事業計画の見直しや資金計画の見直しを余儀なくされた。
- どの団体も、事業計画をほぼ達成したが次年度への課題は「資金計画」であったため、2月にはオプション伴走支援として「資金調達アクションプランづくりワークショップ」を開催し、次年度に向けた具体的な計画を立ててもらった。実行団体の内1団体は次年度緊急コロナ枠休眠預金活用事業の採択を受けて活動を行う予定である。

## 広報伴走支援

### 概要

当事業では、実行団体の活動と休眠預金の活用方法に関して幅広く周知するべく各実行団体の広報活動に対する伴走支援も行なった。

広報伴走支援の内容は大きく分けて「団体訪問によるインタビュー」「事業ホームページ及び、SNSでの情報発信」「各団体の広報に関する課題のヒアリングと解決策の提示」の三つである。

### 団体訪問によるインタビュー

事業期間中に「事前」「中間」「事後」と3回に分けて全10団体にインタビューを行った。インタビューの中で実際に実行団体が活動している地域に訪れ、活動に関わっているスタッフやボランティアの方々、活動に協力して下さっている地域の方々、受益者の方々から直接話を聞くことで実行団体の活動の必要性を改めて認識すると共に、外からの視点として感じる実行団体の活動の魅力をフィードバックすることで実行団体のモチベーション向上にも繋がった。



### 事業ホームページ及び、SNSでの情報発信

各実行団体の活動と休眠預金事業の概要を掲載する独自のホームページを作成した。各団体の活動や集合研修、セミナー等の情報をブログ形式で掲載し幅広く広報を行った。



〈ホームページURL〉 <https://kuma-kyumin.com>

### 各団体の広報に関する課題のヒアリングと解決策の提示

各団体が感じている広報上での課題に関して、広報担当が個別にヒアリングを行い具体的な解決策や成功事例の紹介などを行った。具体的には、「様々なツールで情報発信を行っているがツールが多すぎて負担になっている。自分たちの活動においてどのツールを使うのが一番適しているのかを教えてください。」「LINEグループでメンバーとのやり取りを行っているが画像の保存期限が切れてしまったり、メンバーが自由に入退室できてしまい使い勝手が悪い。適したツールを教えてください。」「今後、マンスリーサポーター制度を開始したいと考えているのだが、どのようなやり方があるのか教えてください。」などの相談があった。それらに対し、広報戦略の策定するためのワークショップや各種広報ツールの紹介などを通して伴走支援を行った。



## 広報伴走支援による成果

### 実行団体の広報に対する意識の変化

事業開始当初は地域内の受益者や、協力者などに情報を届ける事のみを目的としていた団体が多かった。しかし、伴走支援の中で社会課題解決のためにはソーシャルインパクトが必要不可欠であり、そのためには地域内だけではなく地域の外にまで自身の活動を発信し1人でも多くの方に知っていただく必要があることを伝えたことにより、各団体にとっての広報活動を行う意味に変化が発生した。ある団体では、施設を利用してもらう受益者に対してSNSを通して情報発信を行っていたが、受益者にはSNSよりもチラシや口頭での説明のほうが届きやすいことに気づき、SNSは協力者や同じような活動を行っている団体向けに発信する方針に変更した。

### 実行団体の発信する情報の変化

意識の変化が発生したことにより実際の広報活動にも変化が生じた。活動報告の発信が目立っていたが団体のミッションやビジョン、現在取り組んでいる事業で発生している課題などに関する発信も増えた。



### 休眠預金事業に対する理解の深化

各集合研修にて、各団体に自団体の活動に加えて休眠預金事業に関する発信も行うことの重要性を説明。これにより各団体がSNS投稿への「#休眠預金活用事業」追加や、制作する広告物への休眠預金事業マークの貼付を意識して実行するようになった。

実行団体への広報支援に関するアンケートでは、「情報発信に関する考え方が変わった」といった意見が多く、中には「マンスリーサポーター獲得の仕方や、適切な情報発信に関しても教えてほしい」といった今後の情報発信に向けた意見も見受けられ、実行団体の広報に対する意識の変化を感じることができた。



【NPO法人 せいしとらんし熊本の配布絵本】



広報伴走支援担当 **小笠原 晟一** 一般社団法人 WING kumamoto 代表理事

1995年東京出身。進学で熊本の大学へ。熊本地震で被災した小中学校にバスケットボールを届け、子どもがバスケットボールをできる環境を作る活動を開始。社会の変化により子どもの活動環境が狭まってきていることに強い課題感を持ち、バスケットボールを通じた「こどもの活動環境創り」をミッションとした一般社団法人WING kumamotoを2018年に創業。2021年からは「社会課題解決」にミッションを広げソーシャルビジネスコーディネート事業を展開。事業伴走支援やクラウドファンディングなどを活用した資金調達サポート、ソーシャルビジネス事業企画、プロダクトデザインなどを通じた社会課題解決事業の伴走支援に取り組んでいる。



第1回集合研修

会場：熊本YMCA

2022年6月19日(日) 10時～17時

**目的** 各実行団体が助成事業を実施する前にその必要性や妥当性を判断(事前評価)するために、さらなるブラッシュアップに取り組むことで、各事業をスタートできる状態にする。

**スケジュール**

- ① 助成決定証書の授与
- ② 実行団体発表
- ③ 実行団体が行う事業評価について 講師：office musubime 河合将生氏
- ④ グループに分かれて「事業が目指すコミュニティづくり」について考える
- ⑤ グループワーク(気づきや学び、感想、今後のアクションなど)について全体共有



**研修**

「実行団体が行う事業評価について」評価に取り組む意義と活用方法

- ◆「評価」とは何か? ◆評価の種類
- ◆評価を通して何を知りたいのか
- ◆事業評価(プログラム評価)の考え方(サイクルと5階層)、進め方
- ◆指標とデータ収集方

**アンケートから**

- ・改めて評価とは、PDCAをどう非営利活動にも生かしていくのか、地域をPDCAでみていくことの面白さと、全て共通しているなあと感じました。
- ・評価方法が具体的に理解できた。
- ・具体例など詳しく説明頂いてわかりやすく吸収出来た。
- ・“なぜ絵本の配布をするのか”が伝わって、納得を得られたのがよかった。
- ・私たちの伝えたい事を、もっと明確に言語化して想いを伝えることが大切だと感じた。
- ・ロードマップのお話や団体の課題がわかってよかったです。

**アドバイザー・プログラムオフィサーからのコメント**

**五味：**場づくりをしていくときに、いろいろ悩み、壁にぶつかった時に大事なことは、原点に戻ること。なんで自分がこれをやっているのか。これをやって、自分が幸せになるかどうかが一番大事だと思っている。やっているうちに活動が広がって、それをやっている自分が楽しいし、いろんな人とのつながりが嬉しい、ということが原点になっている。仕組みづくりがわからない、信頼関係づくりが難しい、持続可能な財源的な問題など、メンバーと共有し、情報共有しながら進めていけたらと思う。

**河合：**それぞれにコミュニティについて語る時、抽象的になりがちなので、きちんと見ている現場に立ち帰ることが重要だなと思った。常に現場で話す。そして研修のような全体で話す場では、一段抽象化して話す。その往復が大事である。各団体と私たちのチームの仲間でできていくといい。引き続きよろしくお祈りします。

**三島：**社会課題解決に携わるときに、楽しそうかどうか大切だと思っている。今回皆さんの発表や分科会の様子から、笑顔でよかった、いいスタートが出来そうだと感じた。今年度は大きな規模の事業を短期間でやらなくてはいけないので、設計の見直しなども必要になってくるかもしれないが、組織作りや次年度以降の継続に必要なお金についても向き合ってほしいと思う。

**成果と課題**

実行団体が行う「評価」について基本的な事項について外部アドバイザー河合氏に講演いただく。緊急枠は「事前評価」「事後評価」を行うことになっているが、3か月の集合研修の発表の中で、必然的に「評価」を行うことになっていくので、基本的理解は必要であると考え、研修内容に組み込んだ(事前に「実行団体向け評価ハンドブック」配布)。



第2回集合研修

会場：熊本YMCA

2022年10月1日(土) 10時～17時

**目的** 第1クール(2022年6月～8月)を振り返り、第2クール(2022年9月～11月)のアクションが具体化している。団体同士の交流をはかる。

**スケジュール**

- ① 実行団体発表
- ② アドバイザー活動紹介(ハートフルポート代表 五味 真紀氏)
- ③ アドバイザー活動紹介(NPO法人Chance For All 中山 勇魚氏)
- ④ グループに分かれて「団体の課題」について考える
- ⑤ 全体共有、アドバイザーからコメント
- ⑥ 全体交流会



**研修**

**五味：**まちの人と人がつながる多世代交流カフェ～住みたいまちは自分たちでつくる～

- ▶ ハートフル・ポートのこれまでの活動紹介
- ▶ 地域には課題が山積! どうする?
- ▶ 居場所を作るときに大切なポイントと継続させるためのコツ
- ▶ 住みたいまちは自分たちでつくる

**中山：**生まれ育った家庭や環境に関わらずしあわせに生きていける社会の実現

CFAが大切にしていること「こどもたちが、今も将来も幸福であること」

- ▶【well-being】幸福なくして、教育なし
- ▶【あそび】あそびこそ、さいこうのまなび
- ▶【体験】体験(わくわく)が人を育てる
- ▶【参画】じぶんたちのくらしはじぶんたちでつくる
- ▶【共創】つながりが力になる
- ▶【居場所】居ただけでいい場所
- ▶【多様性】ごちゃ混ぜで過ごす
- ▶【個性】Be Unique!

**アドバイザー・プログラムオフィサーからのコメント**

**五味：**目的はそれぞれだが、その価値は何かということを考えていただくと、これからより良い活動が展開されるのではと思う。ボランティアの考え方についてもいろいろ出たが、そこで活動することが価値であると思う。

**中山：**困っている人って、今の社会にはまってるから困っているの、はまっていない人たちに寄り添っていくには、やっぱりちょっとおかしいことを、おかしいように考えて活動して欲しいと思う。

**三島：**この1年間で皆さんの事業のフェーズがずいぶん変わらと思う。現段階では組織形態が変わることに対する迷い、不安や戸惑いも感じていることと思う。どういった目的で基盤強化するか、法人化するか。目指す事業の実現に向けてどういう方に活動に参加してもらうか。アドバイスしたなかで、専門家という話もあったが、どういう人に活動に参加してもらったらよいかもあわせて検討してもらえたらと思う。

**河合：**原動力となっているものは何かというのは大事にすべきところだと思う。やっていくことの価値を表現する、言語化することが評価指標につながる。原動力、活動の価値、大切にしていること、それを言語化することで評価指標になるということ。継続していくためには、何を基盤としてどこまでやるかということで、お金の部分や拠点を整備するなどということ、それだけでなく思いの部分が基盤として大事だ。

**成果と課題**

団体自身がどう活動をやりたい、どうなりたいかを考えて最後のゴールを意識して事業実施を、事業実施期間で終了ではなく、自分達がどう組織にしていくかを長期的な視点・展望を持って考えてほしいと考えアドバイザーの事例紹介を組み込んだ。長期的視点も持ち、全体交流会を行ったことで、実行団体同士の交流が図れた。



**目的** 第2クール(2022年9月～11月)を振り返り、第3クール(2022年12月～2023年2月)のアクションが具体化している。次年度に向けた事業計画・資金調達について検討している。

### スケジュール

- 1 実行団体発表
- 2 戦略的ファンドレイジング 講師：三島理恵氏(NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ 広報・ファンドレイジング総括責任者)
- 3 グループに分かれて「団体の課題」について考える
- 4 全体共有、アドバイザーからコメント

### 研修

#### 戦略的ファンドレイジング

- ▶ 夢(目指す社会)の商品化
- ▶ 財源の確保(財源の種類と特徴)
- ▶ 中長期目標 共感メッセージ



### アンケートから

- ・ 寄附以前にスタッフとの時間を沢山とり、actionを明確にしたいと思いました。
- ・ ずっと悩んでいた部分や、どう進めていいか考えていた問題が解決しました。
- ・ 今必要なことや、わかりやすいお話しで大変勉強になりました。広報活動の大切さや、組織の中での話し合いや団体としての価値観のすり合わせなど...今足りていないことが見えました。
- ・ 実績ゼロの状態から団体の方向性を話し合ったり、ロゴを作ったり、寄付をいただく準備を整えたり、寄付して欲しい人に響くビジョンの言葉選びなど参考になりました。寄付をいただく準備をすぐ始めようと思いました。
- ・ 絵本配布が一段落し、取り組みも何となく中だるみようになっていたが、次年度以降を見据えて考えなおすきっかけとなり、また新たに頑張ろうという気持ちになった。
- ・ ファンドレイジングはお金を集めるだけのことではない。我々のしていることに参加してもらうこと。そのためには、自分たちのしていることの意義や目的に賛同してもらえるだけの自信を持って相手に伝えること。

### アドバイザーからのコメント

**三島**：皆さんの関係性がまさに支え合う多様なコミュニティなのだと感じた。住民みんなが支えびともなるし、支援者になるという意識を住民みんなで作っていかうとしている。

**五味**：街全体が子ども達の居場所になるような、うちだけではなく、まちの一人ひとりが子どもたちを育てていこう、そういう地域にしていこうとしている。

**中山**：1回目、2回目、3回目と、皆さんがやりたいことや目指すところが絞れてきたり、固まってきたりも増えてきているなど思っている。

### 成果と課題

各団体見えてきたこと・達成できていること・課題として考えていることが整理できていたようである。次年度を見据えて、持続可能な活動・組織・資金はどの団体にとっても課題である。午後からのアドバイザー三島さんの講義は、団体にとってもヒントになる内容であったようで、「アンケート」からの「SWOT分析」やビジョン・ミッションの共有・強みの分析等、団体内でやってみたいなどの感想が多くあった。



**目的** 本助成にかかわるすべての人にとってよりよい最終審査会とするために、実行団体が1年事業の報告(取り組みや成果・課題)をするとともに、各実行団体への質問やフィードバックを通して、各団体の発表をブラッシュアップする。各申請団体がお互いに質問し合うことで、団体同士の関係性を育み、今後の連携・協働へつなげる。

### スケジュール

- 1 実行団体発表
- 2 プログラムオフィサー河合氏からのフィードバック&評価について
- 3 報告会に向けたアナウンス等

### プログラムオフィサー河合氏からフィードバック

- 最終報告会での報告だけでなく、完了報告書にもまとめることになるので、そこに向けての評価のポイント。全部を伝えることが果たしているのかどうか考えてほしい。何を伝えたいのか選択することも必要。
  - 事業実施後の目標について再確認。
  - 1 様々な問題を抱えた子どもや若者やその家族、被災者などが安心して自分らしく過ごせる居場所が地域や色々な場所にできている。
  - 2 日常生活に困難や問題を抱える子どもや若者たちなど、必要とする人たちが、相談・支援を受けられる体制ができ、県内に広がりつつある。
  - 3 実行団体の運営基盤と連携が強化されることにより、地域の課題解決に柔軟に対応できる体制ができつつある。
  - 助成事業全体の目標についても確認。
- 成果報告会なので、成果の部分を知りたいとなる。そのために押さえてほしいポイントとしては、前提(事業の理解)スタート地点も必要で、成果ばかりが強調されると最初はどうかだったのかということが気になってくる。変化の幅を伝えるためにも、最初の状態を伝えてほしい。それから成果、変化など。そこにさらに加えられるといいと思うのが、アウトカムの部分。やっていることがどんな意味があったのかという話。結果だけでなく、やったことで社会にどんな意義や価値をもたらすものだったのか。1年の事業なので主にアウトプットの部分が求められるが、アウトカムの部分もプラスされるとさらに良い。



### アンケートから

- ・ それぞれのプレゼンをみて気づきがあり、学びになった。
- ・ 終始和やかな雰囲気、互いの団体へのアドバイスをし合ったりできたので、本番に向けての改善点が明確になりました。
- ・ 利き手側を意識した伝え方をもっとブラッシュアップしていきたいと感じました。
- ・ 発表の課題を明確にすることが出来た。自団体の発表に関してコメントや感想を頂けたので。
- ・ 河合さんの伝え方(右脳左脳)の話が個人的に大収穫でした。
- ・ 今回応援で参加させていただきましたが、他の団体様の発表やそれに対しての事務局からのフォローやその他の団体からのメッセージ、それを受けてのそれぞれさらによくしていこうとの想いの相互作用の空間に、とても学びが多かったです。

### 成果と課題

作成する側の視点ではなく、聞いてもらいたい相手の視点でどう作成するか、動画を効果的に使うには?など河合氏からのアドバイスや他実行団体からの感想を参考に最終発表会を期待したい。



## 「支えあう多様なコミュニティづくり」シンポジウム ～共歩・共感・共創する熊本～10のチャレンジから未来を描く～



アーカイブ録画

### 目的

- 実行団体が1年事業の報告(取り組みや成果・課題)を発表する
- この事業にかかわる実行団体や関係者・参加者で熊本の未来を描く

### 参加人数

101名  
会場63名(来賓・プログラムオフィサー・アドバイザー・実行団体・資金分配団体・一般参加)  
オンライン参加18名・ライブ配信視聴20名



### 【オープニング】

開会あいさつ・事業概要・プログラムオフィサー、アドバイザー紹介、来賓紹介、進め方の案内

## 第1部 実行団体発表

### 発表内容(8分：動画3分を含む)

- ① 団体・助成事業を取り組むことになった経緯(短く)
- ② 助成事業終了時の目標
- ③ 取り組んだこと
- ④ 目標の達成度や成果
- ⑤ 助成事業で成長したこと・変化したこと
- ⑥ 今後の方向性
- ⑦ 相談したいこと・お手伝いいただきたいこと



## 第2部 交流会・実行団体体験ブース

- 昼食をとりながら、受益者の変化や現場感を写した2-3分動画を視聴する。
- 発表を聞き、応援カードに「各団体の課題・相談したいこと・応援できること・アドバイスや感想」を書いて、実行団体体験ブースを回りながら応援カードを手渡し、交流を深める。



## 第3部

### グループトーク みんなで考える「熊本の未来」

#### 【グループの発表より】

#### ○テーマ1：事業を通して考えた「支えあうコミュニティ」成果や課題

- 課題としては、事業が忙しくメンバーで話し合う時間がなかなか取れないという意見が出た。それを解決するためには、日常的に不安などを共有できる場があることが大事だということを話した。またこの事業の成果については、皆さんから出た意見として「助けて」といえたことが大きかった。
- オンラインチームでは天草の皆さんとゆっくり話す機会となった。わらびかみやワールドフレンズの取り組みを行政とどう関わっているかお聞きした。民間の資金として休眠預金を活用し事業を進めてくれたおかげで、行政としても関わりしろができ、今後天草地域の中でさらに展開する可能性があるということだった。行政だけでは難しい社会課題を、民間の資金を活用し活動を後押ししていくということを実感できた。



#### ○テーマ2：熊本地震・豪雨災害・パンデミックの経験から考える「熊本の未来とは」

- 震災だと助け合うことができたが、パンデミックでは人と人が分断されてしまった。それらの経験から、活動している皆さんからは、それぞれの意見を尊重することが大事だという話が出た。
- 災害やパンデミックが起きたとき、この会場の方は支援する側に回る人が多いと思うが、何か自分にできることはないかとボランティアしたい人たちもたくさん出てくると思うので、ここにいる実行団体の皆さんにはボランティアさんが活動しやすいようにコーディネート力もつけてほしい。ここにいる皆さんは何かあったときに最強のチームになると思う。
- 熊本地震や豪雨災害を経験している私たちは、その原体験があるということ自体が強みであり、自分たちでそれを何とかしようという強いパッションがある。地震や豪雨災害から時間がたち、実際にはまだ復興半ばのところもあるが、だんだん見えづらくなってきている。そこに新しい風を吹き込み新しく創っていくことが大事ではないかという意見がでた。
- それぞれが地域のコミュニティに目を向けること、自分たちの活動や拠点について発信していくこと、お互いに歩み寄っていくことが重要。一人一人が緩く楽しく生きていけるような未来になったらいいなということになった。



#### 【参加者の声：アンケートより】

- 沢山の事業所の方と話をすることができ、その人達が抱える悩みなどを聞いたり、反対に聞いて貰えたりすることによって自分のこれからの行動が見えた。
- プレゼンの内容もさることながら、10団体のみなさんとお互いに繋がりがあった様子を感じました。
- 普段の発表の時にはわからなかった普段の雰囲気や、リーフレット、機械を見る事でもっと他団体を知る事が出来、身近に感じた。
- 他の実行団体の人達の意見と想いを共有できた。特に若い世代の考えや熊本の未来に希望を持っていて共感できた。
- 他の団体の方々との交流や悩み、思いを共有できて、視野も広がり学びになった。

#### 【成果と課題】

多様な団体が一つのテーマについて語り合う時間はなかなかない機会であり、参加者自身(実行団体・一般参加者・アドバイザー・事務局・審査員)が自分事として意見を出し合う場ができたことは有意義であったと考える。

## アドバイザーからコメント

### 中山 勇魚

社会活動におけるつながりの大切さ

今期のメンバーはとにかく仲が良かった。集合研修の間も笑い声が絶えず、雑談にも花が咲いていた。休眠預金というある種の厳密さが要求される助成事業で、時に「本当にその事業は受益者にとって意味があるんですか?」「誰でもできるような事業をあなたたちがやる必要がありますか?」と存在意義をえぐられるような指摘もされる中、それでも最後まで暖かく、楽しげな全体の雰囲気が変わることはなかった。

実は欧米では大人たちの間で「友だちがいない」人が増えており(ここ10年で3倍に増えているというデータもある)フレンドシップリセッションと呼ばれている。実はこれはかなり深刻な事態で、親しい人がいないというのは喫煙に等しいほど健康に悪影響があることがわかっている。一方で、お祭りや花火大会、地域活動などの予算が削減され続け、コロナ禍によって加速されることで地域や社会におけるつながりは減り続けている。

特に社会活動を行うNPOなどにおいてつながりが減っていくことは、受益者にとってだけでなく支援者側にとっても大きな負の影響がある。本来、つながりこそが社会活動の非金銭的報酬の最たるものであり、活動する楽しさであった。しかし、コロナ禍で仲間や関係者とコミュニケーションをとるのが難しく、苦しんでいる受益者のためと無理を重ねることで支援者自身が潰れてしまうという事態が頻繁に起こっている。

そんな中で本事業においては厳しさの中に暖かさがあがり、心のつながりがあった。そんな雰囲気を生み出していた事務局のみなさんに敬意を表すると共に、実行団体のみなさんにはぜひこれからも受益者のしあわせだけでなく自分たちや仲間もみんなが共にしあわせになるような未来を描いて欲しい。

### 三島 理恵

2021年度コロナ対応支援枠で実施された本事業は、コロナ禍でつながりがさらに希薄になった私たちの暮らしをなんとか取り戻そうとする「支えあう多様なコミュニティづくり支援事業」を展開する皆さんを応援する取り組みでした。

子どもたちのために、働く保護者のために、外国籍の人のために、高齢者のために等、熊本県内の各地で多様な活動が実施されました。そういった活動の積み重ねが、地域のセーフティーネットとなり、暮らしの安心につながります。とはいえ、その実践は、簡単なことではありません。「もう、無理だ」と思われたこともあったらと思います。助成が終わったらどうやって事業を継続すれば良いのか…と途方に暮れたこともあったかもしれません。

今回、アドバイザーとして関わらせていただいて感じたことは、簡単に推進できる事業ではないにもかかわらず、笑顔が多く、相互の交流も活発だったことでした。それ自身が、この事業の成果だろうと思います。

このつながりが、さらにたくましい支えあうコミュニティになっていくようにと願っています。

### 五味 真紀

これほど熱い想いを持って社会の課題解決に取り組む人たちが熊本に居るということに感動し、それを熊本出身の私はとても誇らしく思った1年でした。最終発表の時、おそらくこの1年のいろんなことが思い浮かび、涙ぐまれる方もおられました。それだけこの事業に対し本気で取り組まれてこられた証拠でしょう。団体内部でいろんな話し合いもされたことでしょう。時に意見の食い違いもあったかもしれませんが、しかし確実に言えることは、この事業を通して団体の皆さんが真剣に事業に向き合い、チームワークが強化され、何よりも自分たちが目指したい社会の実現に向けて一歩近づくことができたという自信になったことは間違いありません。

子育て、若者、高齢者、障がい者、性教育、農福連携など、活動されている分野はそれぞれ異なりますが、皆さんが目指す究極のゴールは誰もが幸せになれる社会をつくることだと思います。自分が自分でいられる居場所、安心して居られるコミュニティをつくることは、幸せの種が撒かれる土壌をつくること。そして、各団体がそれぞれの専門分野で連携し、お互いの活動を支え合うことで、単体では解決しえない新たな課題解決の実を結ぶかもしれません。震災や豪雨災害を経験した皆さんだからこそ感じるコミュニティの大切さ、連携の大切さ、どんな困難からも這い上がるたくましさは、時代が大きく変わる今とても大切なことです。皆さんと故郷熊本で一緒にできたことを嬉しく思うとともに、同じ仲間として心から尊敬いたします。1年間本当にお疲れ様でした。これからが本番ですが、活動を楽しみ、自分達こそ世の中を動かしているということに自信と誇りをもって突き進んでください。

## 7 事業の成果

### 「支えあう多様なコミュニティづくり支援事業」成果・課題

#### 今回の事業実行を通じた目標

1. 実行団体が掲げた目標について、事業終了後に達成することで、受益者の状況が改善している。
2. 伴走支援を通して、団体の目標や課題に沿って基盤強化・資金調達力・問題解決力などが改善している。
3. 災害やクライシスなどに対応できる連携体制が実行団体・資金分配団体間でできている。

#### 各実行団体の目標に対する達成度や成果

団体名	事業の(目標に対する)結果、成果
一社) 看護のココロ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「やっちゃん保健室」の活動継続。自治会の部会への参画や地域関係機関との連携</li> <li>・「ささえびと」チーム(有償ボランティア延べ46人)</li> <li>・活動の成果を学術的な観点から言語化(論文)※</li> <li>・認知度アップのために広報活動。利用者増135人(月平均16人/2か所)</li> <li>・法人化・団体内の教訓・学び：活動への価値観の確認(量より質)</li> </ul>
一社) 子育てネットワーク 縁側moyai	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「きてきて」(縁側開放プロジェクト) 13回46組参加。子連れワーキング6回開催、気軽に立ち寄れる子育てママたちの居場所ができた。</li> <li>・団体基盤強化：事業の見直し・ミッション共有・法人化、事業の見直し、拠点引越し→団体の目指すべき方向性の共有・やりがい。事業のスリム化、負担の軽減(20回以上の運営会議)</li> <li>・子育て支援団体同士のネットワークづくり(13団体施設&amp;インタビュー)協力団体として連携体制の確立</li> <li>・内外にmoyaiを知ってもらうための広報ツール作成→広報ツールを活用した広報</li> </ul>
NPO法人わらびかみ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・フードバンク事業の整備(拠点・備品など)</li> <li>・地域への活動の広がり、利用者や地域の変化・認知度アップ、支援の輪が広がる</li> <li>・支援体制の構築「天草こども未来ネットワーク結の手」</li> <li>・団体内の学びと成長、スタッフの意識、ネットワーク構築</li> <li>・法人格取得、HPや拠点整備・看板などの整備</li> </ul>
NPO法人せいしとらんし 熊本	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵本の配布220か所(申し込み数533か所) + 読み聞かせ・お話し会(子ども・保護者・関係施設の声)→アンケート</li> <li>・相談業務リアル、「親子で学べる性教育サイト」(アクセス数482回)</li> <li>・アンケート事業 保護者のニーズや認識を可視化することで課題が明確となった→子ども・保護者・社会は学びの場が必要</li> <li>・今後：学校3校、児童養護施設・住宅会社・スポーツクラブなどと連携</li> </ul>
NPO法人NEXTEP	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「未来へ向かう希望」という言葉の発見を経て今回の事業への接続。</li> <li>・事業を進める者自身も楽しむことなどの大切さに気付いた。</li> <li>・できていなかった高校生以上へのアプローチができた。居場所4月から1人入所予定</li> <li>・象徴的な取組みが生み出した「焚火の会」・焚火の会の活動の中で生まれた参加者の気づきや安心感が生まれている。</li> </ul>
株) 南阿蘇ケアサービス	<ul style="list-style-type: none"> <li>・拠点整備はコロナ感染などの影響で着工延期。役場や専門学校の利用、広報協力などにより、行政・企業・学校の連携が進み、他事業への連携や村民への自社の認知が広がる</li> <li>・運動教室94%満足・運動機能改善の事例</li> <li>・毎月の様々なイベント開催で多世代間の交流が進んだ</li> </ul>
一社) フミダス	<ul style="list-style-type: none"> <li>・拠点づくり-若い人が住み続けたいまちづくり 人吉市・ビル所有者・外部人材「マチのジンジブ」(人材育成・教育支援担当)</li> <li>・高校生MyBeingインターンシップ参加者398名、大学生「ガクチカインターンシップ計14名(コロナ感染の影響あり)</li> <li>・連携：人吉市7組織(来年度以降地域内インターンシップ促進事業として予算化検討)、熊本市9組織(地域内のインターンシップ推進を連携中核都市の取り組みとして予算化を検討)</li> <li>・受益者の声(生徒・先生・企業)の意識の変化。今後の連携につながった。</li> </ul>

一社) オルタナ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニティ農園(柿原地区耕作放棄地)取得・整備</li> <li>・相談支援者養成:全20回 定義:「困っている人をほっとけないと感じるすべての人」とした</li> <li>・相談支援者ネットワーク</li> <li>・新たな広がり:コミュニティカフェ BOND、シェアハウスほんやら洞、地域マルシェと居場所づくり・改めて見直す「地域の力」</li> </ul>
一社) Sol	<ul style="list-style-type: none"> <li>・廃校活用・3部屋オープン、必要とする人にとって居心地の良い場がくれた</li> <li>・第3の居場所フレデリック教室整備・安心して活動→不登校2名が進学可能に</li> <li>・スタッフ・保護者・フォークススクールメンバー・地域の人と共に話し合い・運営</li> <li>・情報発信(Sol新聞、HP/SNS)により、団体についての広報・理解が進んだ</li> <li>・団体の成長/変化(基盤強化)・団体のミッションに向けて</li> </ul>
ワールドフレンズ天草	<ul style="list-style-type: none"> <li>・居場所決定までの紆余曲折経緯、理解のある大家さんとの出会い。居場所の設計・設備備品・改装に多くの人の協力</li> <li>・居場所をつくっていくプロセスで地域の人の参加・協力(物品の寄贈を含め)の舞台をつくれた。毎月1回のスタッフミーティング・話し合いの価値への気づき</li> <li>・支援員養成参加者のべ67名。91%参加意欲。20~70代の幅広い年齢層が参加</li> <li>・広報発信 当事者の声の把握と発信、外国人に関する様々な情報整備</li> <li>・行政との連携・協力がさらに一歩進んだこと(内部)</li> </ul>

## 事業全体の成果と課題

### 1. 実行団体が掲げた目標について、事業終了後に達成することで、受益者の状況が改善している。

- コロナ感染が収まらず、拠点づくりや行事開催に影響があった団体が多くあったが、事業内容の検討を行うなどしたことで対処した。またそのことがハード面だけでなく、ソフト面での交流や連携、コミュニティ形成に結果として役に立った(ハードの居場所だけが、コミュニティではないという気づき)。臨機応変に対応しながら、事業の本質や柱を問い直すことで、結果として、目標に近づき、受益者の状況が改善することになった。
- 支援する側・される側ではなく、「みんなの居場所、それぞれができるところで力を出す・助け合う関係」が大事であることが最終的な団体の気づきとなった。そのことで、スタッフやメンバー、応援者、地域の人、行政や企業など一緒になって知恵を出し合いながら課題解決にかかわっていくことが「支えあう多様なコミュニティづくり」につながっていくという認識が変わっていった。

### 2. 伴走支援を通して、団体の目標や課題に沿って基盤強化・資金調達力・問題解決力などが改善している。

#### ▶研修やマンスリーフォローアップについて

実行団体の感想から：定期的に面談がある事で、原点に立ち返り新たな視座を得られることが出ています／悩みがあった時など定期的に答えを頂けたり、活動の軌道修正ができて良かった／アドバイスが大変ありがたかった。勇気を頂いている／事業の進み具合のよいペースメーカーになった／研修や交流会を通して、他団体の活動も知れ、それきっかけで連携も取れるようになったため／他団体からの学びは本当に大きく、仲間意識がたかまっているのがうれしい

#### ▶広報伴走支援について

実行団体の感想から：インタビューが3回あり、振り返るよい機会となった。広報に関するアイデアとなった。

#### ▶オプション伴走支援

課題として多くの団体が挙げたのが次年度以降の運営費や持続可能な資源調達。オプション伴走支援として「コミュニティカフェ」開き方セミナー(2022年12月12日)、共感と協力を集めるために必要なアクション計画づくりワークショップ(2023年2月11日)などを開催し、フォローを行った。



### 3. 災害やクライシスなどに対応できる連携体制が実行団体・資金分配団体間でできている。

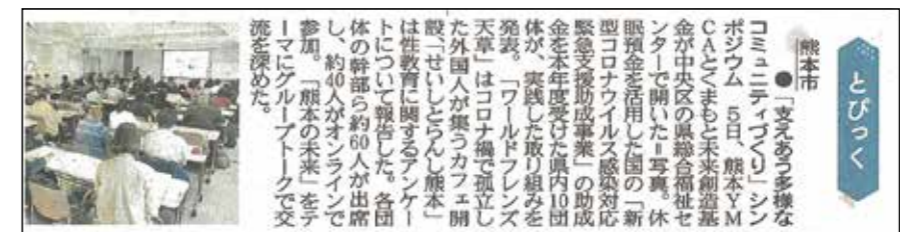
- 集合研修など定期的に開催し、学び合い・交流することで実行団体同士や資金分配団体、アドバイザーなど、一体となったコミュニティが形成されつつある。実行団体同士の連携や今後もつながっていきたいとの声の実行団体から上がっている。今後も何らかのつながりを作っていく予定である。

#### 事業実施後(1年後)以降に目標とする状態

- ①様々な問題を抱えた子どもや若者やその家族、被災者などが安心して自分らしく過ごせる居場所が地域や色々な場所にできている。
- ②日常生活に困難や問題を抱える子どもや若者たちなど、必要とする人たちが、相談・支援を受けられる体制ができ、県内に広がりつつある。
- ③実行団体の運営基盤と連携が強化されることにより、地域の課題解決に柔軟に対応できる体制ができつつある。

- ①新型コロナウイルス感染拡大の影響はあったが、事業を通して、子ども達・若者・子育て世代・高齢者・障がい者、困難を抱える人たち・在住外国人、県内5地域など、多様な人たちの居場所がハード面・ソフト面でできつつある。
- ②各実行団体の事業チャレンジから、今後県内にモデル事業として広げていく体制ができつつある。
- ③事業実施を通して、行政や専門機関・企業などとの連携へと広がりつつあることで、相談体制の繋がりへと広がっている。

#### ●広報・告知(熊本県知事への報告)



【支えあう多様なコミュニティづくりシンポジウム掲載記事】

#### ●実行団体同士の連携事例

##### 株)南阿蘇ケアサービス・NPO法人せいしとらんし熊本

右写真：株)南阿蘇ケアサービスがNPO法人せいしとらんし熊本を講師に招きイベントを開催(2022年12月18日)



## プログラムオフィサーからコメント

### 河合 将生

「たくさんの小さな人々が たくさんの小さな場所で たくさんの小さなことを成す。それで世界の状況は変えられる。」

今回の取組みを象徴することわざだと思いますが、きっといろんな変化を皆さんも感じているのではないのでしょうか？ここで重要だと思うことが3つ。一つは、うまくいったことばかりではなく、困難に直面したり悩んだり、うまくいかなかったことも含めて、「安心ができ、自分らしくあり、助けてと言え、頼り頼られ」の関係性や場、体制をつくりだす機会や気づき、学びにつながっていること。次に、事業（活動）と組織がコミュニティづくりの基盤となること。事業があることで、受益者や支援者とつながり、ステークホルダーとの関わりがつけられ、事業のコミュニティがつけられていきました。拠点や居場所ができることで集える場ができました。法人化のプロセスを通して、組織というコミュニティの目的やビジョン、価値観、運営もより明確になったかもしれません。そしてもう一つは、枠組みを外れてみるものの可能性と「豊かにゆらぐ」ことの大切さ。きちんとした事業ではなくても、「自分が楽しむこと」や「思いがけず生まれてきたもの」「焚き火」など、やってみたことからいろんな発見や可能性につながったこともあったと思います。自由さや気になったことをほっとかないこと、ゆるやかなつながりは、NPOの本質でもあります。事業や組織としてできることもあれば、既存の枠組みを超えて／外したスペースだからできること、そんなコミュニティもありそうです。コミュニティづくりは多様で面倒で悩みも尽きないかもしれませんが、だからこそ、「豊かにゆらぐ」ことを大切に、共に歩んでいきましょう。

### 中村 賢次郎

「支えあう多様なコミュニティづくり」支援のために10の実行団体の皆様が熊本各地で活躍し、多くの人々を支えていただいたことに感謝申し上げます。今、世界は激動の時代にあり、誰一人取り残さない社会が一層求められます。感染症や紛争、災害という苦しい状況に合わせて、人と人との関係から事件や暴力も多く起きています。人は人と関わることで成長し、助け合うことで様々な課題を乗り越えてきました。これまで以上に安心できる「支えあうコミュニティ」が重要とされる時代と言えるでしょう。

今回の10の事業はどれも各地域の人たちが集い、語り、そして一緒にこれからも歩んでいく仲間としてつながっていく大切なお働きです。安心できる居場所であり、多様性を楽しみ、成長の機会を実感でき、社会の一員として認められる場として重要な役割となりました。

人は支え、支えられて生きています。そしてそのことが次の世代まで続くように種が蒔かれました。休眠預金事業のシンボルマークであるたんぼの種のように、一粒の種が広がり、熊本のすばらしい未来を創造できるようこれからも皆さんのご活躍をお祈りしています。

### 宮原 美智子

- 1 事業設計・募集・採択時の事前伴走：キーワードは「コミュニティ」。コロナ感染で行動が制限されたことで様々な分野地域で分断されているコミュニティ。募集から審査まで丁寧な事前伴走を行った。説明会参加32団体（全団体個別相談会実施）、応募団体31団体。県内5地域、様々な分野の団体から10実行団体が選定された。実行団体の内、県内5地域（天草2団体、阿蘇2団体、県南1団体、県北1団体、熊本市内4団体）、形態も様々（任意団体・NPO法人・一般社団・株式会社）。分野：子育てママ・子ども・困難を抱える若者・高校大学生・高齢者・地域全体・外国人・廃校利用・性教育・コミュニティ農園）まさに多様なコミュニティとなった。
- 2 外部PO・アドバイザー：多様なコミュニティづくりにチャレンジする10団体の伴走支援。外部プログラムオフィサー河合氏・アドバイザーに三島氏（子ども支援・ファンレイジング）、中山氏（子ども支援）、五味氏（コミュニティづくり）に依頼、毎月のフォローアップ、3か月毎の研修、プレ報告会・最終報告会の中で専門家の視点でアドバイスをお願いした。
- 3 広報支援：本事業では新たに「広報担当」支援を設置し、①通常の広報ツールの整備、②発信のアドバイスやセミナー、③団体訪問・取材、事業HPでの活動紹介・広報支援を行った。
- 4 全体が大きなコミュニティ：集合研修・交流会・懇親会などを通して実行団体・資金分配団体・アドバイザー間のコミュニケーションを図ったことで、団体同士の連携へとつながった。「ありのまま相談でき、励まし合いながらの助成は初めて大きな勇気となった」「今後もこのコミュニティを継続していきたい」という感想が多くあった。

## 実行団体がめざすコミュニティについての考察

### ●事業計画からみる事業のキーワード

実行団体名	事業名	キーワード
一社) 看護のココロ	お世話役の発掘&育成し、コミュニティを継続する仕組みを作る。	●健康 ●団体基盤強化 ●支援者ネットワーク
一社) 子育てネットワーク縁側moyai	支えあってみんなで子育て	●拠点整備 ●団体基盤強化 ●支援者ネットワーク
NPO法人 わらびかみ	官と民が協働で子ども達を真ん中にした地域共生の居場所づくり	●団体基盤強化 ●支援者ネットワーク ●拠点整備 ●子ども若者 ●地域子ども食堂
NPO法人せいしとらんし熊本	未来輝く!いのちを慈しむハイブリット包括的性教育と相談事業	●子ども若者 ●アンケート調査
NPO法人NEXTEP	すべての子どもたちに安心できる居場所と生きる力を	●地域子ども食堂 ●障がい者 ●拠点整備 ●支援者ネットワーク ●子ども若者
株) 南阿蘇ケアサービス	南阿蘇を「もっと好きに、もっと元気に」地域まるごと事業	●地域子ども食堂 ●健康(介護予防) ●外国人 ●地域多世代交流 ●アンケート調査
一社) フミダス	高校生・大学生のキャリア形成を支援するコミュニティづくり	●就労支援 ●拠点整備 ●アンケート調査 ●支援者ネットワーク ●行政との連携
一社) オルタナ	農福連携の経験を地域コミュニティづくりにつなぐモデル事業	●農福連携 ●障がい者 ●支援者ネットワーク
一社) sol	もう一度繋ぎ直す、廃校活用したおもやいの居場所作り	●拠点整備 ●アンケート調査 ●地域多世代交流 ●健康
ワールドフレンズ 天草	社会資源に繋がれない外国人のためのアウトリーチ型支援事業	●拠点整備 ●外国人 ●支援者ネットワーク ●就労支援 ●アンケート調査

### ●めざす「コミュニティ」とは？

実行団体名	事業開始時	事業終了後
一社) 看護のココロ	「医療や福祉の目線から広がる支え合うコミュニティ」	
一社) 子育てネットワーク縁側moyai	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子育てに関する悩みを、一人で抱え込むことなく、仲間に相談して支え合える。</li> <li>・子育てに関する喜びも、仲間と共有して、互いの子どもの成長をともに喜びあえる。</li> <li>・子どもを社会全体で育てているように感じる。</li> </ul>	子ども達を真ん中にした地域の居場所。子ども達が困りごとなく、笑顔いっぱい生活ができるように、官と民が協働で子ども達を真ん中にした地域共生の居場所づくり。
NPO法人 わらびかみ	「お陰様」「お互い様」の意識を育ていき、ご近所さん同士で支え合える多世代交流の居場所。	子ども達を真ん中にした地域の居場所。子ども達が困りごとなく、笑顔いっぱい生活ができるように、官と民が協働で子ども達を真ん中にした地域共生の居場所づくり。
NPO法人せいしとらんし熊本	性に関わる専門機関が共に協力し、連携し合いながら子どもの成長を見守る社会	
NPO法人NEXTEP	こども・若者の「なりたいた姿を育み」、「伴走すること」を共通のテーマに持った有志がつながりあう。地域に広がる。	
株) 南阿蘇ケアサービス	～ケアの先手を打てる関係性の構築～	南阿蘇の人と人・もの・ところが緩やかにつながっている関係性を築けている状態。
一社) フミダス	産学官が連携した『寄ってたかって若者を育てる』	支え合う多様なコミュニティづくり
一社) オルタナ	いろんな立場や経験を持った、「相談支援員」が一堂に会することにより、農業活動をベースとしたコミュニティ農園を支えていく、相互協働の「場」が生まれている。	困りごとをほっとけないと感じる人、困ったを抱えた当事者・家族、サービスを提供する専門家、この三者が「共同体感覚」でつながり、計画的に相互助け合いを行う、「福祉コミュニティ」。
一社) sol	年齢も状況も多様な人が互いに認め合い、本来の自分を知り、人と支え合う喜びを見つけられる場所	サポートする側・サポートされる側から、サポートする・されるは行き来して互いに助け合える存在になり、『自分らしくあろうとする場』
ワールドフレンズ 天草	これまで支援の対象とみなされていた人達が「支援されるだけでなく各人の能力を活かして活躍できるコミュニティ」	顔の見える場の設定・当事者の活躍できる場の創造・異文化理解の場がある。

# 8 課題と今後の展望

## 事業の成果・課題と今後の展望

### 1. 成果や課題

#### ◆地域の課題やニーズの把握

2020年度コロナ枠休眠活用採択事業での成果や見えてきた新たな課題の中から「県内各地域の課題やニーズを調査し、2021年度「支えあう多様なコミュニティづくり支援事業」を申請、採択された。●対象分野：子ども・若者・子育てママ・困難を抱える人や障がい者、被災地の高齢者・外国人、過疎地や移住者なども含めた地域全体など多様な人たちと●対象地域：県内5地域(天草・人吉・阿蘇・合志・菊陽、熊本市内、県内)など、設定した目標はほぼ達成できた。

#### ◆募集・審査・実行団体選定

●募集にあたって、関係機関やネットワークを通しての広報、説明会と申請前事前個別相談会を丁寧に行うことで、結果として31団体の申請があった。目標とした県内5地域からも応募があった。天草や阿蘇から2団体ずつ採択されたことは成果としてあげられる。県北の採択は熊本市に近い団体であり、県南での実施団体は熊本市と合わせた事業であった。今後県北・県南の休眠預金活用事業を実施できる団体や人材の育成が必要である。  
●外部審査員として、県市民協働課・新聞社・伴走支援専門家からの審査をお願いしたことで、客観的審査やその後の広報・連携につながっている。

#### ◆事業実施・伴走

実行団体10団体はまさに多様なコミュニティとなり、実行団体同士も学びや交流ができ、連携も生まれている。今後も「支えあう多様なコミュニティ」として、2020年度採択実行団体と共に連携していく予定である。

#### ◆事業の限界・資金分配団体実施体制

●コロナ枠1年の事業であり、実行団体の今後の持続可能な運営の方向性は見えてはいるが、資金調達が課題。2・3年継続した助成事業の必要性を感じる。  
●本事業において任意団体の採択が5団体一内4団体は法人化。1団体は次年度コロナ枠採択決定。任意団体の伴走支援は実務や運営に関する丁寧な伴走支援設計が必要であった(オプション支援を行った)。10実行団体の伴走も学びは大きかったが、大変であった。資金分配団体の事業実施体制をもう少し整えていく必要がある。

### 2. 今後の展望

#### ◆アフター・ウィズコロナにおける自地域の課題・ニーズ調査・把握の必要性

社会活動・経済活動が活発になりつつある。その中で、地域の課題やニーズは再度丁寧に調査し、今後の助成事業の在り方や設計など考えていきたい。

#### ◆担い手の育成

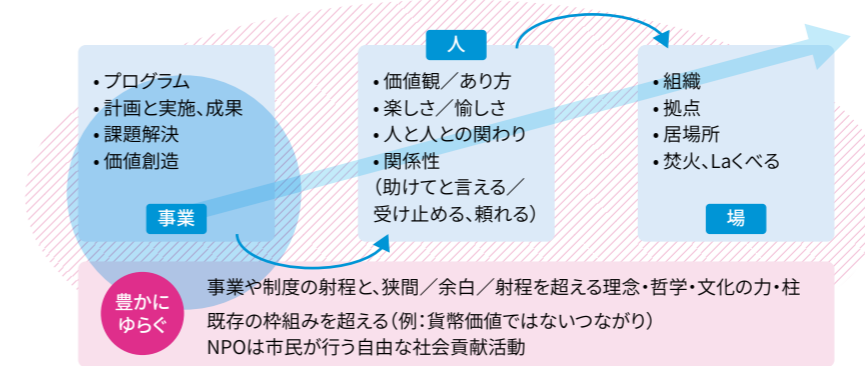
休眠預金活用事業を担える実行団体・伴走支援人材の育成は今後も急務である。行政機関や中間支援組織とも連携しながら、対応していきたい。

#### ◆資金分配団体事業執行体制

本事業は見直し期間の最後の年の事業であり、今後の休眠活用事業の展開を考えた時、資金分配団体としての事業執行体制を再度構築しなおしていく必要がある。

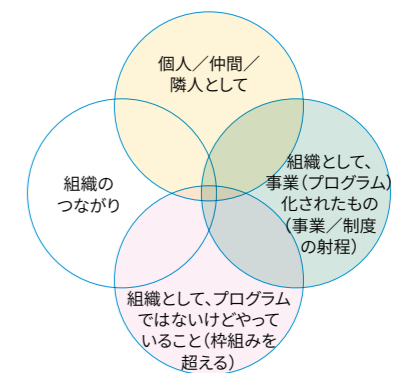
## 「支えあう多様なコミュニティづくり」を振り返って、そして今後に向けて

(河合氏によるシンポジウムの振り返りより)



事業を通して得られた結果・成果を土台に、事業の枠組みにとられない、人の関わりや場の価値を考えていく  
→新たな取り組みや事業の創出、あり方にもつながるかもしれない。

- それぞれの人にとっての、関わり方やコミュニティのあり方はさまざまである。事業によるつながりだけでなく、事業が終了してもつながれる/つながっている(と感じる)価値。
- プログラムづくり：参加の場や出番・役割をつくるものでもある  
事業：支えるもの・財源：助成金・委託
- プログラムがない場・機会：余白・自由・アンラーニング(学び直し/手放すこと)がもたらされる
- 拠点ができること
- 組織ができることでもたらされるもの：基盤とは何か？  
コミュニティの基盤となるのは「一人ひとりの存在と価値観との触れあい」
- ☆プログラムがなくても来られる・自分たちらしくあれる  
そのための財源：会費・寄付・貨幣価値でないつながり・関わり合い・生活、その文化醸成
- ゆるやかなつながり・間・すき間の大切さ
- 「豊かにゆらく」ことの大切さ



### 熊本地震・豪雨災害・パンデミックの経験から考える「熊本の未来とは」

- 一人ひとりがゆるく楽しく生きていける未来
  - ・一人ひとりが自分のことで精いっぱいけど、
  - ・信頼できる人の情報
  - ・自分ごととして捉える。発信する・受け取る
- いろんなことがあって自然と活かされている。人と人が分断。
  - ・助け合う。ローリングストックや備え。
  - ・人との縁を日頃からできるような未来。一人がみんなのためにみんなが一人のために。言語の壁も超えて。
- つながっていること、助けてと手を挙げること、お互いさまだと思えること
  - ・支援する側、「困った」と言いにくい。普段から助けてと言えぬ関係性。
  - ・活動があることを知ってもらおう(普段から)
  - ・困ったら助けてもらい、今度は助ける側
  - ・Laくべる/アンケートの工夫：やれることを具体的に挙げていて、できることを選ぶことができる
- 原体験が体の中にある
  - ・自分たちで何とかしたいと思う強いパッションがある
  - ・新しい風でつくりあげていく

## 休眠預金活用事業「新型コロナウイルス感染対応緊急支援助成事業」について

### 休眠預金活用事業について(一般財団法人日本民間公益活動連携機構(JANPIA) HPより)

「民間公益活動を促進するための休眠預金等に係る資金の活用に関する法律」(休眠預金等活用法)に基づき、2009年1月1日以降の取引から10年以上、その後の取引のない預金等(休眠預金等)を社会課題の解決や民間公益活動の促進のために活用する制度が2019年度から始まる。

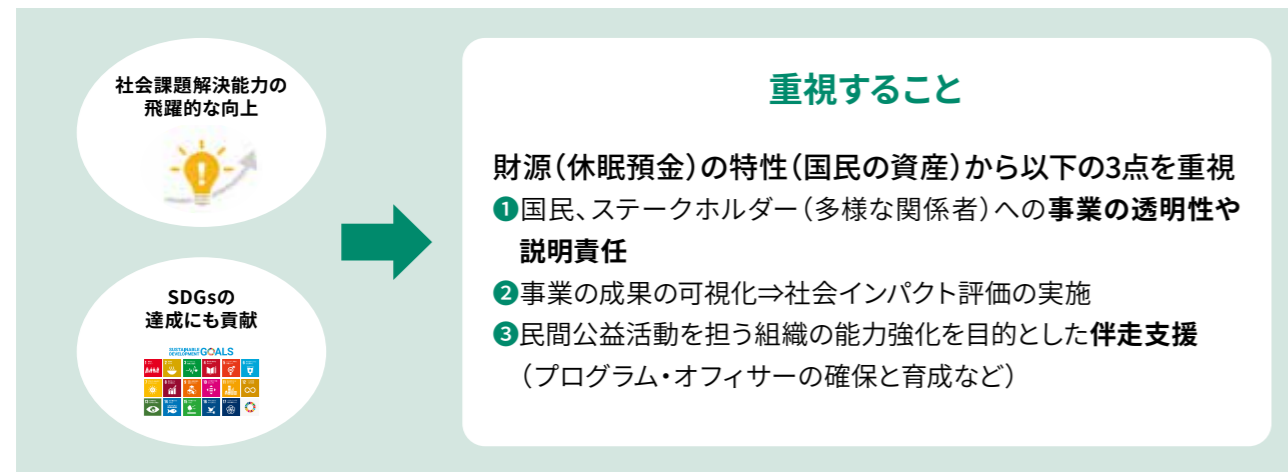
#### 【目的・効果】

##### ●活用の目的

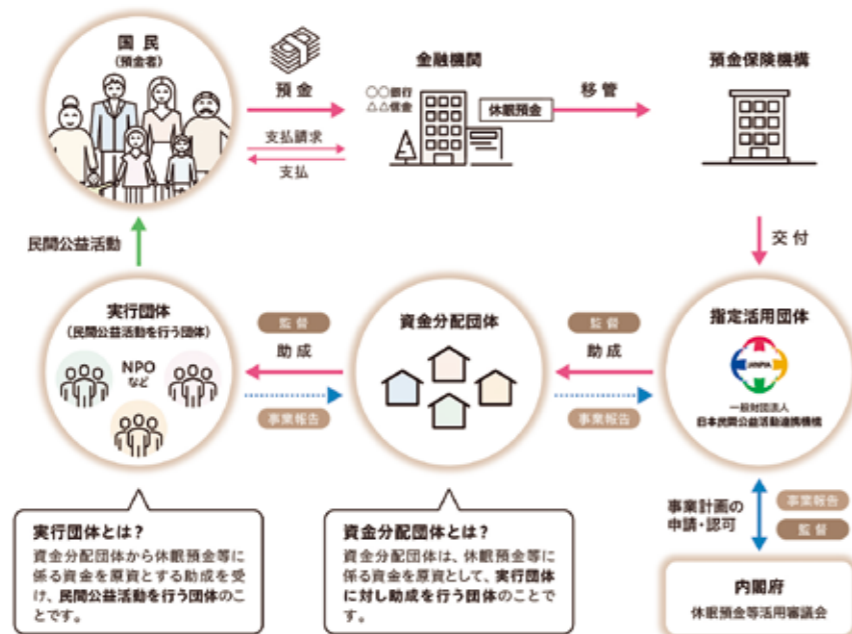
国、地方公共団体が対応困難な社会の諸課題の解決を図る  
民間公益活動の担い手の育成と民間公益活動に係る資金調達を整備

##### ●目的達成期待される効果

社会の諸課題の解決のための自律的かつ持続的な仕組みが構築  
民間公益活動を行う団体の資金的自立性と事業の持続可能性を確保



### 休眠預金活用事業の流れ



出典：一般財団法人日本民間公益活動連携機構JANPIA HP (<https://www.janpia.or.jp/>)

### 【実行団体一覧】

事業名	団体名	団体所在地/連絡先	HP / URL
お世話役を発掘&育成し、コミュニティを継続する仕組みを作る。	「やっちょろ保健室」運営協議会 (一般社団法人看護のココロ)	熊本県合志市豊岡 2217-145 ☎master@kango-k.com	<a href="https://kango-k.com/">https://kango-k.com/</a>
支えあってみんなで子育て	子育てネットワーク「縁側moyai」	熊本市東区尾ノ上4丁目20-27 ☎engawamoyai@gmail.com	<a href="https://engawamoyai.wordpress.com/">https://engawamoyai.wordpress.com/</a>
官と民が協働で子ども達を真ん中にした地域共生の居場所づくり	NPO法人わらびかみ	熊本県天草市今釜新町3436番地1 ☎080-1703-8518	<a href="https://www.warabikami-npo.com/">https://www.warabikami-npo.com/</a>
未来輝く!いのちを慈しむハイブリット包括的性教育と相談事業	NPO法人せいしとらんし熊本	熊本市北区徳王2丁目1-48 ☎096-323-6070	<a href="https://www.seirankumamoto.com/">https://www.seirankumamoto.com/</a>
すべての子どもたちに安心できる居場所と生きる力を	認定NPO法人NEXTEP	熊本県合志市幾久富1123-5 ☎096-227-9001	<a href="https://www.nextep-k.com/">https://www.nextep-k.com/</a>
南阿蘇を「もっと好きに、もっと元気に」地域まるごと事業	株式会社南阿蘇ケアサービス	熊本県阿蘇郡南阿蘇村久石2721-2 ☎0967-67-1606	<a href="https://www.minamiasocare.com/">https://www.minamiasocare.com/</a>
高校生・大学生のキャリア形成を支援するコミュニティづくり	一般社団法人フミダス	熊本市東区三郎2-20-15 ☎096-284-1840	<a href="http://www.fumidas-project.com/">http://www.fumidas-project.com/</a>
農福連携の経験を地域コミュニティづくりにつなぐモデル事業	一般社団法人オルタナ(農福連携推進部門:100年ボン)	熊本市北区徳王2丁目1-50 ☎096-201-4318	<a href="https://www.100nenbond.com/">https://www.100nenbond.com/</a>
もう一度繋ぎ直す、廃校活用したおもやいの居場所作り	一般社団法人sol	熊本県阿蘇郡高森町上色見1388-1 ☎0967-62-2228	<a href="http://sol-momo.com/">http://sol-momo.com/</a>
社会資源に繋がれない外国人のためのアウトリーチ型支援事業	ワールドフレンズ天草	熊本県天草市中村町7-6 ☎world.friends.amakusa@gmail.com	<a href="https://wf-amakusa.com/">https://wf-amakusa.com/</a>


### 【資金分配団体】

事業名	団体所在地	連絡先	HP / URL
公益財団法人 熊本YMCA	〒860-8739 熊本市中央区段山本町4-1 熊本YMCA本部事務局	096-353-6397	<a href="https://www.kumamoto-ymca.co.jp">https://www.kumamoto-ymca.co.jp</a>
一般財団法人 くまもと未来創造基金	〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビル903号室	096-340-1192	<a href="https://kuma-kyumin.com/">https://kuma-kyumin.com/</a>





**YMCA**  みつかる。  
つながる。  
よくなっていく。

  
おもやい